

成・壽

SEIJU

2005年

第36卷

冬期



大圓武志大和尚 遺偈

草鞋萬里

そうあいばんり
草鞋萬里

海内開縁

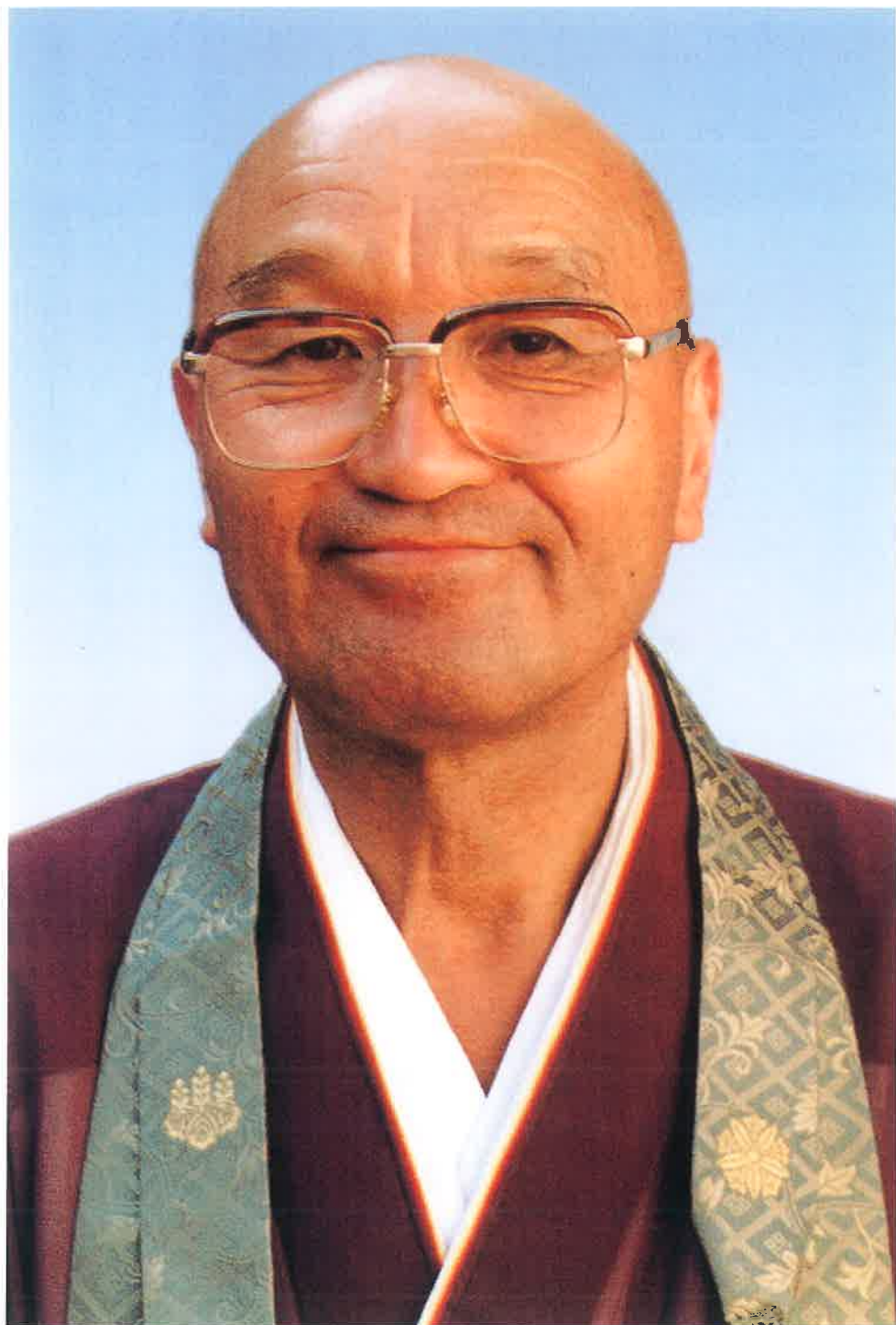
かいだいえん
海内縁を開く

大志無盡

だいしつ
大志盡くる無く

成寿嚴然

せいじゅげんぜん
成寿嚴然



■特集1 追悼黒田武志老師

大圓武志大和尚が遷化して、早や一周忌を迎えます。一月四日・五日の大夜と本葬儀の模様をグラビアとして再録いたします。





祭壇（羽根をイメージした）



▲大夜導師 石田征史老師



◀ 黒田俊雄老師「大夜説教」



▶ 大夜読経



◀ 遺弟代表 黒田博志



大志無慮 成事嚴然

◀▲本寺様より中興号許状下附

▼大夜読経





▲檀信徒総代代表 中村治雄様



▲友人代表 東郷 敏様



◀ 倫子夫人焼香



▲乘炬師 黒田俊雄老師(右)、奠湯佛事師 篁素明老師(左) ▲奠茶佛事師 亀野哲雄老師





▲葬儀委員長 熊谷豊太郎様あいさつ





遺影



遺弟黒田博志本葬儀御礼あいさつ

檀信徒送葬告別焼香





教区ご寺院先導のもと茶毘出棺



参道を埋めつくす多くの檀信徒の皆様に見送られて

謹啓

初冬の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、今回善光寺季刊誌『成寿』第三六号をお届けいたします。

この号は、特に昨年暮れに遷化致しました当山二世中興大圓武志大和尚の追悼号と致しました。一月四日・五日に行われました通夜、葬儀のご報告を中心に、二月十二日に行われました四十九日法要並びに、当寺開山榎庵白純大和尚正当二十七回忌法要等のご報告をさせて頂きました。ご高覧頂ければ幸いです。

皆様のご健勝をお祈り申し上げますと共に、今後とも尚一層の御法愛、御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

平成十七年十二月吉日

横浜善光寺 住職 黒田博志 合掌

カラ	―	■特集1 故黒田武志老師 大夜・本葬儀	1
特集	●	追悼 黒田武志老師	18
カラ	―	■黒田武志老師ありし日々の姿	39
	●	お悔やみの言葉	47
	●	遺稿 おもいやりの心	60
	●	中興二世 大圓武志大和尚の足跡	71
カラ	―	■特集2 白純老師二十七回忌	73
特集	●	白純和尚の人と功績 大田山光真寺を訪ねて	77
連	●	くらしの中で読む『正法眼蔵』面授の巻・その十	84
読	●	秋彼岸法会・特別法話『無常観』	92
	●	『留学僧育英会』の方向性について	110
	●	ニュース・アラカルト	111

●表紙説明

伊藤喜三郎（三喜庵）先生が、大圓武志大和尚の修行僧時代を描いたものである。左に伊藤先生の大和尚を描いたスケッチを載せた。



巻頭言

善光寺住職 黒田博志

季刊誌「成寿」三十六号漸く発刊に至り、心よりただただ感謝御礼申し上げます。

まことに光陰矢のごとしと申しますが、師父大圓武志大和尚遷化致しましてより早や一周忌を迎えます。先年の一大事。当山にとりましては不意に訪れた不測の事態。もしもの備えなど全くもちあわせておりませんでした。

あれから一年、この間無我の境地、学ばずとも、不知不識、唯夢中に刻々走つてまいりました。いま私は師父大圓大和尚の遺志を頭上に戴き敬い慎しみつつ、

巻頭言に尽くしております。大事なもの、尊いものを失って、はじめて知る存在の大きさ、師父大圓大和尚の偉大さです。しかし私が気づくには、あまりにも遅すぎております。

師父の存命中は、その恩愛の深さになれて、大事を怠っております。

折にふれ、「博志、なにかもみ仏さまにお任せすればいいのだよ」といいながら、まかせないで、自らの手を尽くし、すっかり修めてしまっていたわが師父。やっぱり凄かったと、いまさらながら遠きを追う毎日です。

過ぎて、今年二月四日、当山開山榎庵白純大和尚の二十七回忌でした。師父は早くからこの号をもって、目に見えぬ大和尚の尊いご恩に報いるべく、特別追悼号を企画し発行の準備をしておりました。しかしいまとなっては叶わぬ師父のご遺志に従い私は些かでもこの「成寿」に合わせ惜別の念をこめ回忌追悼させていただきます。

善光寺も、やすらぎの郷も、「成寿」もお蔭をもちまして、今日大圓和尚の意に

添うて常住坐臥、平穩に導かれております。

師父大圓和尚が開創以来確固とした目標をもち、終生変えなかった三つの理念。

- (一) 宗祖を通して釈尊に還る
- (二) 仏道を通して世界の安心、平和、幸福に寄与する
- (三) 利他の思想で発願利生

この信念、この信条、私もまた師父の心を心として、未熟でありましても、一生懸命尽くして参りたいと誓願しております。

どうぞ横浜善光寺ご檀家、ご関係者の方々師父に倍旧のご導愛ご叡智いただきますよう、「成寿」発行に鑑みご挨拶申し上げます。

■特集

追悼黒田武志老師

平成十六年十二月二十九日、黒田武志老師が遷化され、まもなく一年。この間に老師を偶ひ、皆様から寄せられた追悼のお言葉をご紹介します。



追悼のことば

大本山總持寺貫首 大道晃仙

横浜市・善光寺住職黒田武志老師のご遷化に際し、謹んで哀悼の意を表します。

「釈尊のお示しになった大慈悲の教えを如何にして世界全体に広めてゆくか。」多くの仏教者が思いを巡らすその永遠の目標に向かって、自ら身をもって具体的にそして積極的に実践されたのが老師のご生涯でありました。

自らの宗教活動の信念を「宗祖を通して釈尊に還る」という言葉で常々表現しておられたと承っております。

世界に仏教を広めるというその大誓願を成就するには、まず人材を育成するということから始めなければなりません。

そこで老師は昭和五十九年に、「善光寺海外留学僧派遣育英会」を一カ寺独力で設立し、毎年

留学僧を海外に派遣するという事業を興しました。他国からの求道者も日本に招き、事業全体が確固たる成果を実現するに至りました。誓願成就への勇猛心、そして実行力、まことに称賛に堪えません。

昨今世界各地において悲惨なテロや戦闘が連鎖し、平和とはほど遠い状況を呈しています。国や民族間でお互いに自らの考えや価値観を相手におしつけようとするために、多くの惨劇が繰り返されています。

現代はまさに広い視野に立つての相互理解と、代償を顧みない大いなる慈悲の心が希求される時代であります。世界の平和、人々の幸福のためは今何ができるのかということをわれわれは問い直し、そして具体的な活動をどのように展開させるべきなのかを考えてゆかなければなりません。

そのことはすなわち、一生をその大命題に捧

げた老師の歩まれた道を、今一度われわれが深く学び、そこを抛りどころとして世の中に広く働きかけてゆくことにつながります。老師の御徳は賛嘆し尽くせません。

ここに重ねて老師のご遷化を心から悼み、追悼のことばといたします。



八面六臂の大菩薩

前永平寺監院 南澤道人

黒田武志老師が遷化されて早くも一周年の忌景を迎えようとしております。月日の経つのは歳と共に迅速に感じられます。

老師のことは善光寺海外僧育英事業のことで業界紙等を通じて大まかには知って居りましたが、直接お目に掛かることが出来たのは私が大本山永平寺の監院職に就いてからであります。

或る時老師は御令室と共に上山されて、善光寺海外僧育英会について、両大本山禪師さまのご慈慮をいただき、それぞれ監院に役員に加わってほしいと就任の要請に見えた時でした。然しそれより以前長野市篠ノ井円福寺藤本幸邦老師の処でお話しの折、偶々黒田老師の事に話が及びました処、実は黒田老師のご両親は藤本老師のご先代全機老師が取り持ったご縁で、ご母堂

は須坂市の名刹興國寺先々代のお嬢様であつて、此の寺の座敷がお見合いの場所ですと、お聞きして、信州人の一人として何か身近なご縁を思つたことです。

やがて善光寺様に拝登の機会も出来、次第にご親交を重ねていただきましたが、取りわけお世話になつたのは、中国から留学の為に来日して私の弟子となつて駒澤大学を卒業した胡君が、育英生として認めて頂きドイツ等に留学し、又善光寺に於て立職法戦式をさせて頂いたご恩は忘れることが出来ません。

高祖道元禪師七五〇回大遠忌には焼香師をお勤めいただき、育英事業の着実な発展を願ひ、善光寺の興隆は勿論、タイ、スリランカ、中国、韓国等海外仏教者との交流友好に奔走された老師は正に八面六臂の大活躍をされた大菩薩であられたと思います。

今既に育英会のご支援を頂いた優秀な人材が

各方面に活躍され、将来の仏教の興隆と世界の平和に大きな力となることでしよう。

大寂定中安らかにお見守り下さるよう老大和尚の品位増崇を念じて止みません。

合掌



黒田老師を偲ぶ

大雄山最乗寺山主 石附周行

今春、四月九日〜十日にわたって、成田市郊外にタイ国ワット・パクナム日本別院ウポソト（布薩堂）の落慶式が行われた。かつてワット・パクナムで修行したご縁の方々と一緒に参列し、その日はあたかもタイ国に居るような雰囲気であった。

ワット・パクナムの住職さま以下百名の僧侶が来日され、境内は熱心な在日タイ国人の仏教徒で大盛況であった。

住職さまが私共の席を通られる時、「クロダ・クロダ」と掌を合せられ挨拶をいただき胸がつかまる思いであった。

黒田武志老師は日本パクナム会の会長をつとめられ、日タイ仏教界の交流に力をよく尽された。この日の落慶式出席の方法、別院への支援・

協力のあり方に心を砕いておられ、亡くなられる前年の十一月に打合せ会議を開き、握手をして別れたのが最後であった。

私は、黒田老師に多大なご法愛をいただいた。大学時代には、桐ヶ谷寺さんに時折寄せていただき、彼の書齋で熱心に日記を書いていたのを、強烈に思い出す。その後、両本山の安居を経て、ワット・パクナムに安居することになった。これは、彼の発案であり、私は彼の陰に寄り添って行った。

黒田老師というお方は、自分の個性を相手に印象づけたとしても、決して相手に先んじて歩むことはされなかった。私は、どんなにか引き立てていただいたり助けてもらったりしたことか。

国際的感覚は抜群で、幅広い人材の育成には生涯をかけたといってもよいだろう。善光寺育英会の留学僧派遣事業は、一寺院単位では向後

にみる事ができないのではないかと思う。

彼は、握手をくったくなく差し伸べたが、あの骨太のゴキゴキした感触は、忘れることができない。あの手で書いた日記も、いまでも書き続けているように思えてならない。

一周忌を迎えるに当たって、彼を偲びつつ大寂定中で如何お過ごしか——と尋ねてみたが、破顔微笑するのみで、握手は返ってこなかった。



全力疾走の生涯67年

曹洞宗大乘寺山主 東 隆眞

平成十六年十二月二十九日午前九時四十五分、横浜市の曹洞宗善光寺第二世・黒田武志老師は遷化した。病名は大腸癌。世寿六十七歳。

同学の畏友、大八木春邦老師（山形県・保春寺住職）から、この日の午後、電話でしらせをうけた。手がけていた寺務を即時中断し、直ちに弔問に走った。梅嘉庵で倫子夫人にご挨拶して、黒田老師のご遺体を拝した。

あの闊達豪快な黒田君（以下、同窓のよしみで親しみをこめて黒田君とよぶ）が、年長の私を措いて旅立つとは、なんということか。口もとに笑みをうかべたおだやかな表情で横たわっているすがたをみて、これは、私はからかわれているのではないか、今にも、冗談だ、冗談だよ、ハハハハと起きあがってくるのではないか

と疑いたいほどであった。黒田君と私は、駒澤大学、同大学院と同級であつて、およそ五十年にわたつて深いちぎりを結んできた。ここに、思いつくまま黒田君を追悼したい。

まず、黒田君は、信心のあつい人であつた。仏教僧が仏教の信心にあつのはあたりまえだが、そのあたりまえのころを豊かにそなえていた。私は、国の内外をなんだか一緒に旅行したが、ホテルの自室でも、午前四時前後には起床し、念持仏をテーブルの上に安置し経文を誦んでいた。お仏舍利を尊崇し、国外、国内の各地の道場にさまざまなかたちで物心両面の供養をしてきている。諸仏、諸菩薩の像を日本国、外国の多くの寺院、精舎に寄進している。ひと知れず、こういう陰徳を積んでいるのである。また、黒田君は、誓願に生きた人だといいたい。若いころ、大本山永平寺、大本山総持寺の僧堂から全国を托鉢行脚し、タイのワット・パ

クナム、アメリカの禅センターで修行し、血と涙と汗を流して苦勞を積み、やがて横浜市に善光寺を開創した。事実上、善光寺の開山である。その根底にみなぎる原動力は、道元禪師、瑩山禪師の両祖を通じて釈尊にかえるという願ひであり、誓ひであり、祈りであつた。

黒田君は、善光寺でありとあらゆる教化活動を展開している。黒田君に帰依する壇信徒は三千軒といい、あるいは五千軒ともうわさされる驚異的数字である。それは、黒田君の誓願力による辛苦のおのずからなる結果であつたといえよう。

また、黒田君は、現代の日本仏教界、わけでも曹洞宗において群を抜いた国際人、世界人であつたといつてよい。これはアメリカ開教に生涯をささげた実兄前角博雄老師の指導、影響も無視できないが、タイ、アメリカをはじめ、ヨーロッパ、インド、東南アジア、韓国など、各国

に出かけ、また、かの地の仏教者と交流を密にした。

「横浜善光寺留学僧育英会」を結成して、みずから理事長となった。その成果は、平成十四年一月の時点で、すでに関係国二十カ国一地域、百十四件に及ぶ。善光寺檀信徒の理解、協力の賜でもある。これはすべて黒田君の単独、善光寺一カ寺の浄業であるところが特長である。このような例は、あまりない。少なくとも、日本仏教界でのこの種の活動の先駆者といえよう。また、黒田君は、後進の人材育成にも力を注いだ。育英会は、その典型である。育英資金を受けた者のなかには、学位取得者三人、大学教授数人がいる。黒田君のもとで出家得度した人は、老若男女あわせて三十人、いや五十人を超えるだろうという。

黒田君は、ご子息四人を、タイのワット・パクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職を

招いて、タイ仏教上座部の得度を受けさせた。このとき中村元博士も同席された。日本仏教史上、最初の出来事であろう。あるいは、若い者に、だれかれとなく、そつと小遣いを渡し、将来を囑望したのである。

黒田君は、人間的魅力に富んだ人であった。倫子夫人を二六時中たよりにし、あてにして、「ミチコ、ミチコ」と呼んだのは、誰でも知っているほほえましいエピソードである。その夫人は、寡黙で、ものしずかで、みずから「口下手です」とおっしゃる。

歌を愛し、酒を愛し、美術品を愛した。ことにあたっては即決、即断まさに実践の権化であった。私は、黒田君と倫子夫人に京都の清水寺観音さまの境内に瑩山禪師にかかわる建碑をはかった。清水寺の森貫さま、大西寺務長さま、森庶務部長さまのご理解をいただいで成就したとき、私は、随所に黒田君の人間的魅力を大きく

感じた。

思い出せば、雲のように、次から次から湧きおこる。このへんでやめる。黒田君の生涯は、全力疾走の六十七年であった。

黒田君、ほんとうに、ながいあいだ、いろいろ、たくさん、ありがとう。

(平成十七年一月二十二日付「内外日報」より転載)



あの熱血さが忘れられません

清水寺貫主 森清範大僧正猊下

瑩山禅師様の碑がご縁で曹洞宗の方ともお話しする機会が増えました。新潟県のある寺に行くくと總持寺の中興記がありまして、それを見るところ瑩山禅師様が總持寺の形成されていく姿をご覧になって清水寺のように実に壮観だったと書かれていました。そんなことにもご縁を感じていましたところですよ。

今でも、黒田老師のエネルギーシユな話し振りが思い出されます。ファイトある方でした。そうでなければ、あんな立派な碑ができないでしょう。碑の裏には英文も刻まれていましたね。人は「熱血」というものに惚れるものですね。黒田老師は道元様のご威光を実行して、それをこつこつと実現なさっておられました。(談)

なぜ…方丈さん…

檀家総代 熊谷豊太郎

平成十六年十二月十日、お見舞に病院を訪ねました。冬の落日でも大きな窓の部屋は明るく、方丈さんはベッドの上上半身を起こした姿勢で、にこやかに迎えてくれました。

ベッドに寄ると方丈さんは、無言で手を伸ばされ、自然と握手となりました。初めての握手でしたが、ぬくもりと意外に強かった握力、その感触は今でも掌にはつきりと残っております。傍に腰をおろすと「ハーバード大学の講演が」と言いかけ、あとは言葉がなく、私は「体力をつけねば」と互いに半端な話をしたまま、他の会話に移ってしまいました。

そして、この日が生前最後の対面となり、終生忘れ得ぬお別れの日となってしまいました。方丈さんは九月頃渡米、大学三校において講演

を予定、その準備をすすめていた事情もあり、力をこめた握手には、病床に在って、儘ならぬ無念の思いがあったのでは…と察せられます。

十二月二十九日九時四十五分に遷化された訃報は、丁度私が実弟の告別式に参列中に知らされました。前日、前々日と寺にて打合せもして、心構えはあったつもりでも、人の生命のはかなさを、思わざるを得ませんでした。

翌三十日心せくまま梅嘉庵に急ぎ、御遺体を拝しました。こみあげてくる感情のまま、「方丈さん、なぜ、このような姿に、なぜ」と、おだやかな表情に、かすかな微笑さえ浮かべておられる安らかなお姿に、唯々、座りこんで合掌するのみでした。

葬儀は平成十七年一月五日、横浜善光寺の釈迦殿に於て檀信徒葬として厳粛に執り行われ、突然の訃報に生前を偲び悲しむ二〇〇〇名の参列者で溢れました。

遷化された住職の葬儀は、宗門のしきりで行うのが慣例との由。方丈さんは、生前「今あるのは壇信徒のお蔭、私の葬儀は壇信徒葬にして欲しい」と意志を強く告げておりました。

方丈さんと壇信徒との固い結びつきは、慈愛に満ちた温かいお人柄に三〇〇〇を超す壇信徒の誰もが、信頼と敬愛の確かな心の連なりとなっており、方丈さんも常に感謝の念で接しておりました。しかし、殊、理不尽には絶対に妥協しない毅然たる気骨の持主でもありません。

又、深い思慮の上に立ち、大きなスケールで将来を見ずえる先見性により、二十一年前に仏教会より高く評価されている、横浜善光寺留学僧育英会を創設、国際的人材育成と教化活動をすすめ、関係する国は二十三ヶ国と二地域、留学僧は一一六名に及ぶ実績を挙げております。

ゼロから現在の寺門迄三十六年間、二人三脚で苦勞を共にした倫子夫人は、万事控え目で自

らは語りませんが、方丈さんは「ミチ子のおかげ」「ミチ子がいなかったら善光寺はなかった」とシンミリ幾度か話しておられたことを思い出します。

方丈さんも努力の人でした。毎朝四時頃より一とおりのお勤めを済まして、人知れず勉強に励んでおられました。約二万五千冊の蔵書を納めた「羅漢堂善光寺文庫」と名づけた書庫を設け、貴重な文献、高価な書籍も蔵しております。

托鉢行脚から国内、国際的布教活動、行事、記念式典、大教師補任等六十七年間の多面的な道程を駆けぬけていきました。私は溢れるほどの人間的魅力に、対面するだけで安らぎ、楽しく会話を交わすことができました。

方丈さんは「宗祖を通して釈尊に還る」と教えておりました。すべては因縁によって生起するという釈迦の本源に還って、捉われやこだわりのない心境にて、遷化されたものと拝してい

ます。

頂戴した額縁に納めた遺影を安置、毎日みつめあうように拝して、無念に思いつつも、ほほえむ温顔に在りし日の偉徳をつきることなく偲んでいきます。

終りに、成寿山善光寺二世中興大円武志大和尚のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



黒田武志方丈を悼む

防衛医科大学校 名誉教授
三越厚生事業団 常務理事

中村治雄

三年近くのアメリカ留学から帰国して、母から日野のお寺に面白いお坊さんがいると聞いていた。留学中に死亡した父のお参りに行き、善光寺の前身の質素なお寺で、声の大きい、活発な方丈に初めてお逢いした。方丈もロサンゼルスの禅寺で修行して帰ってきて間もないという。お互いに将来の抱負を語り、意気投合することとなった。

寺を大きく新しくして、活気あるものにしたいと考えている様子がまざまざと伺えた。

以来、方丈の活躍は目を見張るものがあり、その企画力と、やさしさから、多くの人達の信頼を集め、檀家の数を増やし、寺の改築、増設などを進めてきた。

寺で開設された医事相談など、当時としてはユニークな試みであり、年一回敬老の日に応援してきた。

寺門の興隆のために、人材の育成も大事であると考え、多くのお弟子さんを育ててきた。尊敬され、魅力あるお坊さんを育てて行くことも方丈の一つの使命と考えていたに違いない。

その国際性豊かな所からも、留学僧の援助など、広い視野から物を見ること、しかも先を読む洞察力など、僧侶とは思えぬ所も多かった。

機関車のごとく、強力な力で、皆を引っ張り、目的に向かって日々進んで行く様子は敬服に値した。

しかし、突然病に倒れ、志半ばで遷化されたことは本人としても口惜しかったに違いない。疾風の如く現れ、私達を追い抜いて去られたことは、私達にとっても残念でならない。

ただ、後を守る者の自覚と奮起を促すことと

もなり、それを糧に、これからの善光寺を盛り立てていかねばならない。

ここに慎んで哀悼の意を表したい。



方丈様の想い出

善光寺婦人会会長 伊藤初枝

かれこれ四十年前になりましたでしょうか、主人がインドでハンセン病治療センターの設計のお仕事をしている時、たびたびアグラの建築現場に足を運んでおりました。ある日搭乗した機内にインド仏跡廻りの僧侶の方々の中、方丈様がおられたのです。

主人は趣味で仏画を描いておりましたので多分主人がお声を掛けたのか、二人はたちまち意気投合し御一緒に仏跡廻りをする事になったのでした。見事な仏跡に心打たれ次々と絵を描く主人に、若き青年僧の方丈様は大そう興味をもって下さった様です。

帰国後早速我が家にお訪ね下さり、以来善光寺様との親しいお付合は今日に至っております。その御縁で「成寿」の挿し絵も描かせて頂く事

になったのです。その後幸運にも十五年目に釈迦殿の設計もさせて頂きました。

昭和四十四年にはお似合いの倫子様を奥様に迎えられ、私共が仲人をさせて頂きました。

方丈様は常に人のためと身を削り頑張つてこられ、育英会を作られ、毎年日本のみならず海外からも二、三名の方を受け入れてこられ、勉強と交流の機会を与えてこられました。御子息の博志さんも今日立派にお勤めされておられます。

平成三年に主人が他界致しました後も、何かとお心遣いをして頂きいつも感謝の気持ちでいっぱいです。

まだまだ早い方丈様とのお別れとなり、本当に残念の極みでございますが、もしかすると主人と二人愉しく仏画のお話しでもしていらっしゃるかもしれません。

敬老の日にお届け下さいました美事に咲いた

胡蝶蘭を眺め乍ら、方丈様を想い出しております。

心からの御冥福をお祈りする日々でございます。



会者定離（出逢いそして別れ）

金蘭の友 東郷 敏

きのうのこのように実に鮮明なのです。大圓和尚と私の出逢い。もう四十年も前になりました。どうか、大本山總持寺、夏期の接心会。多分一週間の参禅会、二十六歳の夏でした。仏教も坐禅のなんたるかも全く承知しない私。

会社は社員教育の一環として職場を放棄してまで、初めての試みだったようです。社長自ら幹部社員七名を引き連れた参禅。やがてこの社長、成寿山善光寺の開基になってしまいました。参禅は社命、否応なしでした。給料のためにと止むなく、仕方なく従った、なにもここまです登らなくとも、人間になる方法はいくらでもある——と煩悶はんもんしていたこと覚えております。

さて坐して私は一向に腹が坐らない。身心脱落の境界全く見えず、さらには、求められる感

謝報恩の心など微塵も湧いて来ない。僧堂は至る處、若い雲水が屯して訓戒の捧を手に指導して下さる。

ただ「坐る」だけなのにそれができない。にっちもさつちもゆかぬとは、まったくこのこと。私に心構えがないから、坐相に表れていたに違いない。不意に「コラッ！キサマたるんだ、死ネエ」とくる。どうも私に恨みをもつ、一人の雲水、一度や二度ではない。一瞬体が弾け、天井まで跳ね上がってしまう。クソッ、いまは囚われの身、これが終わったらやられた分、遣り返す、などなんとも恐ろしい気概、変に勇気が湧いてきた。

それからというものの、私にとって特別な雲水、一点集中、寂とした世界、一朝の止靜。私は夕イミングをはかりながら、合掌ポーズ、警策所望。

どのお顔か確認の必要あり、ために振り返っ

たのです。この所行、のち雲水より、きびしい叱責、危うく耳を削ぐところ危険この上なし、とイターイ灸を据えられました。

ときに「同時というは不違なり」雲水は私の背なに向い合掌低頭。顔が見えない。この憎ッくき奴、なんとという所作。それまで、憎い憎い、悪い悪いと、思い込んでいたのに雲水の奴私に祈っている、どうしたことだ。嗚呼私は思い違いをしていたらしい。

間違ったことを本当と勘違いしている。私はよく間違ひ、すぐ反省する。なんと愚か者か。「突然悪人が善人に変った」思わずゴメン。この憎ッくき御仁こそ大圓大和尚、若き雲水、黒田武志その人だった。共に同じく二十と六。

これが縁起、以来互いは境界線を頻繁に犯し合い、一所懸命生きてきた。いかにも不惜身命、知己の間柄。喇叭の方丈、悪態極悪人のトーゴなどと罵り合い、咬みついて実に四十一年。

同じ道を、同じ志で、同じ方向に、引き摺られるように歩いて来た思いがする。この間柄に誇張はない。以心伝心私は言う、開基となった社長、そして大圓和尚のためだったら、どんな犠牲も厭わない、たとえそのため一命捧げようとも悔いはなし、これは意識しなくても、いつでも肝に坐っていた。

しかしそれは叶わなかった。方丈と私の間は、逢うごとに、わかれるごとに夢が膨らみ、その夢は、都度大概成就する。不思議だった。なんど会っても、その場限りということは一度もない。和尚はその間、寝ても覚めても「祖師を通して釈尊に還る」「利他の思想で発願利生」が基本。この原点の美しき理念は、終生変っていない。生半可ではなかった。

此処五年なぜか、話しても書いても「ボクには残された時間が微ない、限られた刻々になにするのか、なにができるのかそればかり考え

ている」と言う。これは一体なんだっただろう。大圓さまには、天より賦与された武志道へのなにか黙示か示唆か。

「なにもかも、み仏さまにおまかせすればいいんだヨ」と言いながら、マコト疾風の如く駆け抜けて行った大圓和尚。キットくみ仏さまに救われて召されて逝かれたに違いない。その「生き方」に悔いも、心残りも聊かもなかったと信じている。

大圓武志大和尚をお送りするときマイクを手に、倫子夫人「命なるか。命なるか。これが天命というものののでしょうか。如何ともなりません。この上は心から現実に従います境遇はとも悲しいです。でも負けずに精進します。横浜善光寺の未来は檀家さまと共に洋々としております。すべては方丈さまの御蔭。ありがとうございました」と美しく結んでおいででした。やはりみ仏さまに抱かれておいでです。

過ぎた日、生者必滅・会者定離とは善くも謂うたもの、よく翼、命なる哉。

阿啞!! 喇叭の方丈はもういない。オレだオレだの声も届かない。さびしいなあー。
逢うてわずか、別れても僅か三六五日。

合掌



誓願に生きた人

中外日報社中部支社長 形山俊彦

日野公園墓地にさしかかるゆるやかな坂道を何度往来したことだろう。石材店の角を左に折れると釈迦殿に至る。いつの頃からか釈迦殿入口ではなく、奥まった庫裡の玄関から出入りするようになった。がらりと引き戸を開けて声をかけると、「はい」と少し鼻にかかったような黒田方丈の返事が聞こえる。顔を見るや、「おう、上がれよ。待っていた」。その瞬間、私は身も心も黒田方丈のふところに抱きとめられたような気分浸っていた。

横浜・善光寺二世中興大圓武志大和尚の訃に接したのは、黒田方丈の刎頸の友というべき東郷敏氏からの電話だった。新幹線からの携帯電話は聞き取りにくく、黒田方丈が亡くなったということだけ理解できた。電話は頼りなく不安

定な状態で切れた。われに返って時計を見ると、午前十一時頃。高槻から横浜へ向かう途中、私のことを思い出して知らせてくれたのだとわかった。

「黒田方丈」「方丈さん」。東郷氏も、私も、善光寺の家族も、檀信徒の多くも、みな親しみと敬愛の気持を込めて、こう呼んだ。その方丈さんが亡くなった？ 考えてはいけなことが起こっている。胸の中が激しく波立った。

入院したことは知っていた。一度、病室に見舞い、お元気な様子を拝見して何となく安心していた。退院後、名古屋から上京する足で善光寺に立ち寄り、普段と変わりなくお話しした（昨年九月三日）。少し精気がないようにも感じられたが、病後間もないためだろうと樂觀的に解釈した。その時以来のことだった。

夕刻、弔問にうかがうと、病院から戻ったばかりの遺体は、黒田方丈が晩年、ご両親を追慕

して建立した梅嘉庵に横たわっていた。自分が自分の意思で動いているとは思えない状態で、促されるままに座り、安らかな寝顔と間近に對面した。「いろいろと、ほんとうに、ありがとうございました」——やっと出た言葉の端から嗚咽がこみ上げ、全身の力が抜け落ちていった。

もはや伝説と化している黒田方丈の足跡をここで振り返る余裕はない。しかし、その生涯は、寺の子として生まれた自分を厳しく、温かく育ててくれた師父白純大和尚と母堂への報恩感謝の思いに貫かれていた。永平寺の安居途中で下山し、列車を乗り違えてそのまま全国を托鉢行脚。旅中に「無一物中無尽蔵」の境地を開悟するという体験は、「身を削り人に尽くさん」の誓願となり、黒田方丈を支え続けた。

その時の心境を「ようやく自分の本分に気がつき、僧侶に立ち返ろうとしている。一日を疎かにしてはいけけない。もしもいまを疎かにしたら

一生を疎かにしてしまおうと、佛の真の教えに氣付いたような氣がした」「そんな時、あたかも締め切った窓を開け、瞬間に光が差し込み部屋を明るくした時のように、私に差し込んだ一点の光、私の心の窓が開いたに違いない」と語っている。

柩を閉じて後、その人の評価は定まるという。だが黒田方丈の評価はまだ定まっていない。それには、もう少ししばらく時間がかかるだろう。赫々として光彩を放ち飛翔する熱球は突然光芒を失い、闇の中へ消えた。誓願に生きた黒田方丈が遺した人生の意味は、時間をかけて大きくふくらみ、やがて何事かを私たちに語りかけてくるような氣がしている。





A black and white close-up portrait of a middle-aged man with a shaved head, wearing thick-rimmed glasses. He is looking slightly to the left of the frame with a neutral expression. The lighting is dramatic, highlighting the texture of his skin and the contours of his face. The background is dark and out of focus.

黒田武志老師ありし日々
の姿



昭和47年11月28日、晋山結制



勅明王金剛心

永平利安首
宣林村書



京都清水寺 瑩山禪師顕彰碑の前にて



大本山永平寺 高祖道元禪師七百五十回大遠忌焼香師記念 平成14年5月



ドイツ・ニーダーアルタイヒ修道院ユングクラウゼン神父様とともに



大教師補任祝賀会 平成14年2月28日





スリランカ・
ダルマパーラ生誕
135回記念式典に出席

お悔やみの言葉

黒田武志逝去の折、追悼記事等にとりあげられ、また、さまざまなお手紙をいただきました。すべてご紹介することは紙幅の関係でできませんが披露申し上げます。なお、敬称は略させていただきます。

追悼・黒田武志老師

宗教新聞前代表 黛 亨

私が黒田老師とお会いしたのは、十五年ぐらい前のこと。老師は仏教者という前に、人間味のある温かい方だった。その時の老師の肩書は、横浜善光寺住職と横浜善光寺海外留学僧派遣育英会理事長の

二つだけ。その以後、対話や講演を通して、他宗教との交流や国際的活躍をなす中で、實力は評価され、さまざま表彰を受けながらも、肩書はいつも二つのままだった。地位と名誉を意図的に避けていたようで、一仏弟子を任じていたからだろう。住職といっても、寺に住んで寺を守り、檀家を回って供

養するという住職ではなく、むしろ托鉢しながら説法して衆生の命を救済するというイメージを彷彿させる僧侶であった。私には、今でもそのようなイメージが浮かんでくる。老師と、最初に横浜善光寺で会った時、たった二人で膝を突き合わせていた状態であったにもかかわらず、大音響で叫ぶように、釈尊の価値を私

に説いた。私に説法しているというより大衆説法をしている感じであった。

老師の情熱は、強烈な使命感からくるものだった、と思う。その陰に、父の偉大な薫陶があったことは、「兄弟の中で一番の孝行者」と、兄の黒田俊雄師が認めていることや、毎年、二月の最初の第一土曜日に、父の白純老師の供養を、曹洞宗の中でも最も厳肅な御正當献供楓式で、それも曹洞宗の高位の方々を特別に招いて営んでいたことから、それは分かる。

老師の口癖は「宗祖を通して釈尊に帰れ」だった。老師

が、体でもって真実、仏を理解したのは、駒澤大学大学院を卒業後、永平寺での修行の帰りに、托鉢をしながら全国を行脚した時のことだったようだ。飢えと寒さと追い出される屈辱を味わい、感謝も忘れる極限の中で、自己中心の自分から、他者のために生きる回心を体験、その時から、仏に生かされていることを知り、感謝の気持ちに溢れるという宗教の原体験をする。

その後、タイでの上座部仏教の修行、ロサンゼルスでの布教活動を経て、仏への信仰と信念に燃え、日本に帰り、檀家のいない小さなお寺を買

い取って、それを拠点に猛烈な布教を始めた。その猛烈な布教意欲が、私一人に対する説法となったのだと思う。私がかかったころには檀家が二千軒近くになっていた。なかなかできないことである。

老師が、報恩のために立ち上げた事業が、留学僧派遣育英会だった。仏教の有為な人材を発掘し、仏教の発展と世界の平和に貢献するためである。昨年まで、採用者は十六カ国二地域、延べ百十四人に及んでいる。すべて自費で賄った。これもなかなかできないことである。

老師は、昨年十月、米国ハ-

バード大学で大乘仏教の講演をする予定だったが、病の故にかなわなかった。スリランカ、タイなど、アジアの上座部仏教に大乘仏教の価値と和合を訴えてきて、その成果が見え、次の目標にキリスト教が見えてきたところで、昨年暮れ、六十七年の命が燃え尽きてしまった。

今、老師は、肉体の制約を離れ、大好きな釈尊と道元禪師に会い、自由自在にあの世と地上の救いのために働かれています。心よりご冥福をお祈りする。

(平成17年3月20日宗教新聞より転載)

財団法人 仏教伝道教会会長

沼田智秀

肅 啓

本日、黒田武志先生ご遷化の訃報を知り、悲しみに呆然と致しております。

ご家族の皆さまのご心痛いかばかりかと衷心よりお悔やみを申し上げます。先生にはご生前、国内外の道場に物心両面から寄進をなされ、また横浜に善光寺を開山、「釈尊に帰る」という願いのもと、五千軒に上る檀家を教化なされ、大都会に於いて大いに仏法興隆にご尽力なされました。また、国際的にも米国、欧

州諸国、アジア諸国などの仏教者と興隆を密にし横浜善光寺留学僧育英会を結成し、自ら理事長となり二十カ国を超える多くの優れた学僧の育成にも尽くされました。

このような一宗派が行うような伝道に、黒田先生は唯お一人全力で取り組まれた。正に大乘の菩薩であり、私どもの模範とするところでありました。

先生のご恩には万分の一も報い切れませんでした。せめて先生の悲願であった仏法弘通のため先生の分まで精一杯に尽くす所存でございます。つきましては、ご遺族の皆

さま方には、今後とも何卒よろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます、お悔やみとさせていただきます。

合掌

財団法人 国際仏教興隆協会理事長

山田一眞

黒田武志先生のご逝去の報に接し、謹んでご哀悼申し上げますとともに、インド日本寺事業へのご支援と、当協会評議員として長きに亘り御指導賜りましたご厚誼に対し衷心よりの感謝を捧げ申し上げます。

合掌

国際マンダラ協会 田中成明

合掌

黒田老師様の御逝去を心よりお悔やみ申し上げます。年とともに光り輝き、さらに大きな仕事を期待されておられました老師様の急逝は、内外の仏教界にとりまして大きな損失となりました。

先には兄の前角老師を失いました。御兄弟で此の末法に佛陀の使命に生き、身命を惜しむことなく努められた先達として二人を尊敬申し上げます。余りにも早すぎる逝去に呆然自失してお

ります。

御老師さまの遺（偉）業を継承し、兄弟仲良く善光寺の興隆の為に精進下さいます様、御願ひ致します。亦奥様におかれましてはお身体を大切にお過ごし下さい。機会を作り焼香に参りたく願っております。

駒澤大学仏教学部教授・
駒澤大学仏教経済研究所長

吉津宜英

謹啓 このたびは中外日報の記事を見まして方丈様の御遷化を知りまして、おどろいた次第です。すぐにもおうか

がいたし、御くやみ申しあげ
るべきでございますが、一
言書中にて心からの御くやみ
申し述べます。

昨年一月に参上させていた
だき、仏教経済研究所のプロ
ジェクトへの御話を聞いてい
ただきました時には、本当に
お元気でございましたのに、
残念なことでございます。何
と申し上げてよいか、言葉も
ございません。どうか、奥様、
これから住職になられます博
志様ともども、方丈様の御遺
業を継承されますこと、心よ
り祈念申し上げます。

ただ、どうか御尊体の御健
勝は第一にと御願ひ申し上げ

ます。

まことにとどのいせんが、
一筆のみ、心よりの御くやみ
を申しあげ、方丈様への感謝
の心を表したいと存じます。

敬具

駒沢大学茶道部幹事長

野口 徹

本日、黒田先輩ご逝去の報
に接し、まことに驚きいつて
おります。ご家族の皆様もご
落胆いかばかりかと拝察し、
謹んでお悔やみ申し上げます。

黒田先輩には、我々駒澤大
学茶道部に長年にわたり、ご

高配をたまわり、深く感謝い
たしております。突然お別れ
することになろうとは、まこ
とに残念でなりません。

皆様方にはお力落としのこ
ととは存じますが、ご心労の
あまり病気などなさいませ
んに、なにとぞ自愛くださ
いますよう、祈念いたします。

故黒田先輩をしのびつつ、
ご生前にたまわりましたご厚
情に深謝し、謹んでご冥福を
お祈り申し上げます。

合掌

黒田武志老師 御遷下せんげ

横浜善光寺留学僧育英会第二回育英生

静岡県・釣学院住職 河内義宣

先師西脇老師の本葬に弔辭を捧たもげてくださった黒田武志老師が昨年十二月二十九日には突然に逝去され、二月十二日、開山忌にあわせて四十九日法要がつとめられました。六十七年の生涯を疾走され偉大な足跡を残されました。生前お会いするたびに燃えるような誓願と体からほとぼしり出るエネルギーに圧倒される思いとともに一生懸命やっていますかと叱咤激励されているよらかな気持ちになったものです。

遺骨の安置された祭壇にはなつかしい遺影とともに遺偈いけ（禅僧が最後に書き残す詩偈）が掲かかげられていて

草鞋満里

海内開縁

大志無尽

成寿嚴然

草鞋ぞうわ（わらじ）万里

海内かいだい（世界）に縁を開く

大きな誓願は尽きず

成寿山善光寺の心は嚴然

としてある。

とあり、いかにも黒田老師らしい遺偈と拝読させていただきました。

老師は両本山やタイ、アメリカでの御修行の後、横浜に

新寺を建立、一軒の檀家もなるところから始めて三十年の間に三千軒余の檀家を持つお寺にしたのみならず、善光寺留学僧育英会を設立し、宗派を問わず、志のある人達に便宜をはかり、二十年の間に二十数ヶ国に留学僧を送り、また外国から日本仏教を学びたい人達を迎えいれて、その数は百余名になる。一寺院としてこのようなことをしているのは例がなく諸外国からも注目をあつめ、フランス、ドイツ、アメリカ、タイ、スリランカ等々に講演に歩き、八面六臂の働きはまことに何人もなしえないことであります。

最後に、師の誓願に協力をおしまなかつたお檀家の方達に、尋深の敬意を表するとともに、老師の御冥福と善光寺のますますの発展を祈りたいと思います。

(聞法一四七号より抜粋)

松本 芳雄

突然の訃報に接し言葉もございません。

詳しいお話は過日一月十八日光真寺様から伺いました。思い半ばで、さぞや御無念だったことと拝察いたします。必

ず再起すると決意されていた。人の何倍もの人生を駆け抜けられたものと、私も納得するしかないかなと自分に言いきかせています。武志老師様、お名前の通りの生命を懸けた生き方だったのでですね。お見事でした。

光真寺様が仰っていました、「なに、武志は生きています。私の中でも、老師様は生きています。強烈に。山本老師の件でも、私に対しても特段の御配慮をいただきました。ありがとうございます。困難なことと拝察いたしました。すが、いくらかでも武志老師様の御遺志、継続されますよ

うご祈念申し上げます。

失意泰然の光真寺様の心持に、こちらの方が励まされてしまいました。

それにしても、何ともスケールの大きな、立派な生き方をされたものと感銘いたしております。

改めて、心からのお悔やみを申しあげます。

千葉県成東町 岩井文子

御便りを頂戴いたしました。只々驚き、最初は意味がわかりませぬ、何度も読み返し、

現実を知りました。涙が出て
止まりません。

あんなに御元氣な、おやさ
しい、あたたかな方丈様がど
うして、世界平和の為、人の
為にあんなに善根を積んでい
らっしゃったのに……。でも素
晴しい人程、人一倍働かれ力
を尽くし、召されてしまうの
ですね。今は只々、御冥福を
祈るのみです。

くやしいですね。でも方丈
様は天国で見守って下さって
いるのですね。

奥様どうぞお悲しみで御体
を痛められませんかよう、お祈
りしております。

私は一昨年より体調をくず

し、入院したりして御無沙汰
いたしております事、くや
まれます。御葬儀には御伺い
させて頂きたいと存じますが、
お手紙の乱筆で失礼ですが御
悔み申し上げます。

横浜市磯子区 佐伯淳子

仁徳にみちた、とても心に
残るご住職様でした。生前中、
数多くの尊い道徳心をお導き
受けて参りました。檀家の私
達をどんなに慈愛深く支え接
して下さった事でしよう。心
から感謝申し上げます。そん

な尊いご住職様が先たれた
今、私達は残念で深く悲
しみに暮れています。
在りしご住職様のお姿を偲
び、心からご冥福をお祈り申
上げます。

黒田武志方丈様を偲びて 三首

渡辺豊子

悲しみの底ぬけて降る今日の
雪蠟を灯して香たきまつる

善光寺釈迦殿に居並ぶそのな
かに常ににこやかにいまし
方丈様は

亡き夫の戒名に「善光院」を
たまはりき沁々と尊し黒田武
志方丈様

タイ国バンコク ワットパクナム僧院長

H. H. サムデジュフラマハラジャマンガアジャン

黒田武志老師のご遷化に、

深い悲しみを感じています。

お悔やみ申し上げます。

老師がご病気であることは
存じておりましたが、ご回復
は困難だったようです。

遷化に対し私も皆様と同じ思
いのうちにあります。老師は
私がかつて知っていた中で最

も親切な人のうちの一人でし
た。皆様同様ご老師を深くお
慕い申し上げております。

哀悼申し上げます（同じ悲
しみの中で）。

スリランカ・ミヒンタレー

B・サンガラタナテロー

くろだじゅうしよくおくさ
まへ

にほんはさくらがいつぱい
さいているとおもいます。こ
のたびくろだじゅうしよく
さまがなくなられたときいて
たいへんおどろきました。
くろだじゅうしよくさま

にはしようがくきんなどいた
だいたり、いろいろとあたた
かいところでたすけていた
きました。

わすれないおもいでがたく
さんあります。きょうはおし
かさまのたんじょうびの四月
八日です。ぶつきょうのこく
さいこうりゅうのためにつく
されたごじゅうしよくさまを、
おしやかさまはよろこんでお
むかえくださっているとおも
います。わたしのたんじょう
びも四月八日で五十さいにな
りました。

スリランカのミヒンタレー
の、へいわのいのるこくさい
ぼんじぶーぶんかセンターの、

へいわぶっしやりとうよりご
じゆうしよくさまのめいふく
をおいのりいたします。

横浜善光寺留学僧育英会第十九回育英生

程 正

前略

私は善光寺留学僧育英会第
十九回奨学生の駒澤大学大
院の程 正で、二〇〇三年度
の奨学金を頂きまして、大変
お世話になりました。

この度は、黒田武志老師ご
遷化の報に接しまして、心よ
りお悔やみ申し上げます。

老師の訃報をお聞きしまし

たのが、つい最近でございま
すので、お悔やみ申し上げます
すが、遅くなりまして、失
礼致しました。

留学生に対しまして多大な
ご理解とご援助をお示しくだ
さいました老師のご功績に対
しまして、尊敬の念をあらた
にしております。

老師のご恩に報いるために
も、勉強、研究に励みたいと
存じます。

本来ならば、直接お焼香に
あがるべきと存じますが、書
簡にての失礼お許し下さい。

横浜善光寺留学僧育英会第十回育英生
中国社会科学院世界宗教研究所
嘉木揚凱朝
南無本師釋迦牟尼佛

この度、横浜善光寺留学僧
育英会理事長、善光寺住職黒
田武志大和尚が御遷化された
由、深く哀悼の意を表します。
すぐに参上してお焼香をさ
せていただくべきところす
が、なにぶん遠隔の外国（中
国北京）に居りますことゆえ、
それも叶いませぬ、心苦しく
申し訳なく思います。育英会
ならびに善光寺ご寺院の皆様、
壇信徒の皆様方のご悲嘆、い
かばかりとお察し申し上げます。

心からお悔やみ申し上げます。

黒田武志大和尚の尽力で多くの外国人留学僧や研究者は、来日し、また多くの日本人留学僧や研究者が、海外に赴いて国際的な仏教文化交流などを深広にすることができました。黒田武志大和尚の慈悲喜捨のご活躍は、世界平和の向上に大いに貢献をされたものでした。

私も黒田武志大和尚の慈悲喜捨の精神を受け継いで研究生活に精進して行きたいと決意する次第です。

横浜善光寺留学僧育英会第九回育英生

董燕燕（釈満潤）

拝啓

春寒の候、いかがお過ごしでしょうか。

さて、私は台湾佛光山からまいりました董燕燕です。前日黒田先生の四十九日忌に参列させていただきました。当日ご来賓方々が大勢出席なさり、なかなか挨拶することができなくてほんとうに申し訳ございませんでした。ただひたすら先生のご冥福を祈っております。

黒田先生がこの世を去ったのは早すぎです。ショックで

した。まだ恩返しすることができないのに。あの時、東大での留学について、いっばいの不安があつて育英生に選ばれたことは非常に嬉しくて「これから日本では頼りにできる先生がいらっしゃるな」と密かに喜んでおりました。残念ながら一年後自分の健康のため帰国しましたが、ずっと先生のことは忘れてはいませんでした。

一九九九年、本山に東京へ派遣され、その後何度も先生と逢いいろいろお世話になりました。もっともっと先生のご指導をいただきたいですけれど慣例毎年の育英会の集まり

合掌

は「まあ今回用事があって、
じゃ次回行きましようか」と
思っておりました。いま思う
と痛恨の極みです。

まだまだ未熟な私ですが、
これからも育英生としての誇
りをもって世界仏教交流のた
め、頑張っていきたいと思っ
ています。かえすがえすも残
念で言葉ありません。御家
族御自愛なさってお過ごし
いただければ幸いです。

明治大学文学部 山口泰司

拜啓

四月も半ばを迎え春もいよ
いよたけなわの頃となりまし
たが、貴育英会におかれまし
ては、国際社会の中でますま
す重要性を増しつつあるお仕
事に、ねばり強く取り組んで
居られますことに、深く敬意
を覚え続けて参りました。

さて、私はこの四月一日に
一年間のインド留学を終えて、
無事に帰国し、留守中の郵便
物などを整理して居りました
ところ、黒田武志御老師の御
遷化の文字を目にし、余りの

驚きに言葉を失っています。

生前は娘共々大変お世話に
なるばかりで何の御恩返しも
できずに来たことが、つくづ
く残念に思われます。

早速に出向いてお参りさせ
ていただくべきところですが、
新学期早々の忙しい日々のな
か、それも叶いません。

御老師のご冥福を心よりお
祈り申し上げます。

敬具

見性院 橋本恵子

先代様には、主人が大変お

世話になりました。おかげ様で、アメリカで勉強に励む事ができ、人間的にもだいぶ成長した事でしょう。アメリカ留学を経験していなかったら、今の主人はなかったはず。私とも縁がなかったと思います。

そう考えると、私にとって先代様は大変感謝すべきお方であります。生前に是非お会いしたかったと思います。

また、新命住職様のこれからの活躍をお祈り申し上げます。季節の変わり目でもありますので、御身お大切になさいますように。

December 30, 2004

To the Kuroda family,

Please accept my heartfelt condolences on the passing of Roshi Takeshi Kuroda. His beautiful work will never be forgotten. May he be blessed on his new journey.

May those of you who remain also be blessed in this new phase of your lives.

In gassho

一心

Isshin Havens (Brazil)

Zen Center of Los Angeles

おもいやりの心

— 禅仏教の展望と真の教育 —

黒田 武志

成寿山 善光寺（曹洞宗）住職
横浜善光寺留学僧育英会理事長

1. 真の教育と智慧と知識と

いま世界は疲れています。原因となる徴候は、様々な現象としてもたらされ、数えあげればキリがありません。また人間と自然界の間にも理解しがたい現象や恐怖、対処のしようもない出

来事など想像だにしない複雑な苦悩の中にあります。「一体どうすれば」この苦悩と恐怖から逃げられるのか、社会生活の規範である道徳で救い得ないとするなら、「宗教」に求められる役割と責任は重大です。地球は、国は、社会は、個人は、荒廃と疲労を遺し、いつ癒され、本来の

姿に戻れるのか、大きな課題です。本会のテーマは、実にその危機感と如何にすれば解決できるのか、仏陀の教える尊い真理に心を致し、今何か行動を起こす時だということを示唆しているように思います。宗教としての仏教、その一翼を担う仏教こそに究極の心理を求め、苦悩の本質を知って、その消滅と苦悩からの解放を理性的に体現させる必要性を今ほど感じる時はありません。しかし如何せん仏教を伝えるということとは、安易ではありません。伝える者の素養として、事物の無常、皆苦、無我という理を実践体系的にもつ必要があります。

さて真の教育とは何でしょうか？ これにひとことで答えることは至難です。この問いに禅仏教の伝統にのっとって考えるならば、三つのキーワード、即ち、智慧、不断の実践、正しい生活、という言葉が浮かび上がってきます。「仏教」は、文字通り私たち衆生が「仏になるため

の教え」でもあります。ではどうすれば仏になれるのか、その智慧とは、その洞察力とは、事物の本質に迫るとは、などに求めて私の信念とする仏教を述べてみたいと思います。

多くの大学ではさまざまな分野の知識をカバーした教育プログラムを提供していますが、真の教育というものはデータやある種の技能の取得だけに関するものではありません。学歴や職歴を発展させ、また、我々が直面する世界的な問題と取り組もうとする若い人たちにとって知識というものは、殊に21世紀の情報化時代、大切なものです。が、それだけでは充分ではありません。教育は、生活面での現実的満足という個人的レベルのものであれ、その時代の大きな問題を解決するという広いレベルのものであれ、その時代の大きな問題を解決するという広いレベルのものであれ、ただ知識だけのものであってはならず、洞察力に富んだ智慧と解け合った

ものでなければなりません。ここにおいて仏教的取り組みは、教育に対して貢献することができただけではなく、21世紀の繁栄を目指す時になくてはならないものなのです。

大乘仏教の伝統を伝える私たちの理想とする「菩薩」とは、智慧と思いやりの性格を備えたお方であるとよく言われます。ここで智慧（サンスクリットで Prajna プラジュニヤ）というのは単なる知識ではなく、自己と世界の性質についての深い洞察のことです。知識はデータとして受け渡しができ、情報として記憶に残せるものですが、智慧はもつと深いものです。智慧は、深い理解や賢明な決断をするために心を如何に使うか、その洞察力を与えるものです。

智慧は文殊菩薩にたとえられることがありません。禅仏教の通常の瞑想堂にはこの菩薩像が堂の中央部に安置されています。片手に剣を持つています。この剣は妄想と無知を切り払う能力

を表わします。貧困、飢餓、環境破壊といった世界規模の諸問題の多くも妄想と無知の結果である場合が多いようです。人は困苦の源たる妄想や無知を切り払うことによって自己を自由にし、物事を明瞭に見ることができるようになります。この仏教的取り組みはキリスト教でいう「真理は汝を自由にする」というのと非常によく似ています。智慧を養い真理を体得することは、仏教的生き方の重要な様相です。先に言いましたように、大乘仏教では「智慧」と「思いやり」の二つを重要なものと位置付けます。「智慧」が鳥の翼の一翼なら、「思いやり」(サンスクリットで karuna カルナ)はもう一方の翼なのです。両翼がなければ鳥は飛べません。言い換えると、思いやりのない智慧は潤いがなく、消極的です。逆に、智慧を欠いた思いやりは誤った方向に行きかねません。

このように、教育は存在する全てに対し深く

思いやる心を養うことを重要とせねばなりません。昨今多くの教育機関の傾向である専門化や個人のキャリア志向、この是非はさておき、教育者にはなぜ教育に携わるのかという大きな心象図を先ず心に持つ必要があると思うのです。教育は、自分たちのためだけでなく遍く全体的なものへと「思いやり」を致せる心の育成、他の人や万物のためになるという生き方を果敢になしうる「智慧」の醸成が基本にあるべきであろうと考えます。

私たちが賢くあり、明確な決意ができ、妄想や無知でなく現実を踏まえることができるように、智慧をもって知識を補う必要があります。思いやりは、学習を通して世界全体のためになるように、専門化やキャリア志向という最近の教育傾向を補うために欠くことのできない大事な徳目です。

2. 道元禅師の「止むことなき実践」生涯にわたる教育

私は今日、日本の曹洞禅の伝統を代表する一人の僧侶として、ここで禅仏教の観点から教育について述べたいと思います。先ず、「禅とは何か？」を問う必要があります。本来「禅」は中国語の“Chan”からきたもので、これは沈思黙考、瞑想を意味するサンスクリットの概念“Dhyana”を転訳したものです。日本の禅仏教は主として三大宗派に分かれています。即ち、「栄西」(一一四一—一一二五)が開基した臨済宗、「道元」(一一〇〇—一一二五三)を開祖とする曹洞宗、中国僧「隠元」(一五九二—一六七三)が開いた黄檗宗からなります。禅宗の真髄は次の言葉で要約することができます。「心の中を見よ、そうすれば仏教が会得されよう。」このように禅宗はこの会得につながる瞑想に重きを置いています。いわゆる禅とは我々の心が何かにこだわって

る、とらわれている、そのこだわりやとらわれから心を自由に解放してやることなのです。私
が属している曹洞宗は道元禪師が七六〇年前に
開いたものです。今日この宗派の寺院は全国に
およそ一五、〇〇〇あり、最大の檀信徒を擁し
ております。「道元」から第四代目「瑩山禪師」
が普及に努められ、以後曹洞宗には釈迦牟尼仏
の教えを正しく伝えた「二人の開祖」として尊
ばれているわけです。

さて、宗派の開祖「道元」の最高傑作といわ
れる代表的なものは「正法眼蔵」です。仏陀が
体現された事物の真の本質を如何に悟り、苦惱
からの解放を実践的な方法で説いています。こ
れは九五巻と語録一〇巻からなり、宗門の根本
著作となっています。原文は非常に難解とされ
ていますが、一節に「仏陀の道を学ぶことは、
自己を知ることである。自己を知るといふこと
は、自己を忘れることである。自己を忘れると

いうことは幾千万の事物による確認を得ること
である。幾千万による確認を得ることは自己と
他者の身心から離脱することである」とあり、「正
法眼蔵」に説かれる教えは「智慧と思いやり」
というものを簡潔に表しています。

仏教を学ぶには先ず何よりも自己を知ること、
即ち、己はいつたい何者なのかを探求すること
にあり、人は自分を探求するにつれ自分を「忘
れ」るようになる。現代に生きる自分は欲望を
満足させることが価値だと思いつ込んでいる、だ
から、自分へのとらわれから離れないでいる。
自分の欲望にとらわれては、自己から抜け出す
ことはできない。大事なことは「自分を忘れる」
ことだと教えている。自分の独自性と純粋性を
得ようとこれまで蓄積してきた自分の知識、経
験、差別心がなくなるにまかせられるようになりま
す。自己という牢獄から開放されると人は自然
界、地球、全宇宙（幾千万の事物）とこの瞬間

に一体となります。この真理の只中に生きるということは自由になることであり、他人の自由とともに（身心から離脱した）純粹生活の自由を経験することになります。これが眞の智慧です。

「自己を忘れる」という考えは現今の若い人々には非常に縁遠いものかもしれませんが、なぜなら、現代世界の多くの人々にとって人生は欲望に満ちていて、自己中心の利得が人々を駆り立てる唯一のものであるからです。けれども、そのような自己中心のライフスタイルは憎悪、競争、衝突、貧困、飢え、自然破壊、そして恐らくは究極的な人類の没落といったことにつながっています。

我々は、「自分、或いは自分自身、そして自分」というものに固く縛られているように思えますが、実際には他人の迷惑や外部の規模というものに動かされています。これこそは、道元の「自

己を知る」ということなのです。重要なのは、自己をまさに宇宙の一部であるかのような状態において宇宙を自然に顕現させることです。

道元にとって自己発見はただ禅の瞑想実践を通してのみ得られるというものであり、この瞑想や「只管打坐（ひたすらに坐る）」は、目的やゴールを求めて行ずるものではなく、ことごとく目的のない瞑想、自己利益を伴わない無条件の瞑想だということです。従って瞑想が啓蒙のためですらないという考えにつながってきます。この絶対的な立場こそ「究極の静謐の心境」と禅の伝統において呼ばれているものなのです。道元はこのところを、「身心脱落」といい、「身心」は人間を形成している一切を意味し、精神の存在とその卓越性が極めて明らかにされており、言い換えれば「悟り」とは、ある精神的な力を手に入れることを示しているように思う。

例えば、この「究極の静謐の心境」は最も単

純な行為に現れます。実際に手が汚れていようといまいと習慣的に手を洗うとか、また他人と挨拶を交わすとき敬意のしるしとして両手を合わせる、といったことはすべてそのような心の表現なのです。両掌を合わせるといふ行為は、日本では何かを祈念したい時、あるいは神社仏閣等を訪れ、うやうやしく手を合わせる。この手を合わせるという単純な習慣は実は素晴らしいことなのです。天と神仏と私が一になる心のかたちを現しているものなのです。しかしながら今日若い人の間では、こんな習慣が次第に見られなくなりました。淋しいことです。

この「究極的静謐の心」と「禅瞑想の実践」は道元の教える仏法と人間の問題であり重要な二本柱です。道元が意図した無条件の形で瞑想を実践するなら、その形自体が仏陀の姿です。そこには豊かな智慧と全ての事物の本質に対する明哲な洞察力をもつこととなります。瞑想の

精神を持続的に実践するという性質が大切なのです。ものを食べるときは、ただ食べればよいのです。食べ物の栄養とか健康上の価値とか味を考えるのではなく、ただ「食べる」のです。飲むときも、それがお茶であればそのお茶の味のみよしあしとか、飲む行為が心を癒したり何かのためになるかといった余分なことを付け加えずに、ただその瞬間に没入して「飲む」ことに専心すべきなのです。これが「いまここ」ということなのです。

道元が中国で修行中でのこと、非常に暑い日でした。彼はある寺を訪ねた時、堂を連ねた中庭に一人の老僧侶が椎茸を干しています。灼熱のもと汗にまみれ、熱い石台に椎茸を一個一個取り出して丁寧と並べています。彼は寺の料理長（典座）。道元は見るがまま「貴方のような尊いお方がどうしてこんなきつい仕事を若い僧にさせないのでか」と問う。老僧は笑みを浮か

べながら答えました。「他人のする仕事は私のする仕事にはなりません」。道元はなおも「でもご自分の健康を考えれば、この炎天下はあまりにもきびしいと思います」。これに対し老僧は「瞬間は今ここにしかありません」という。道元はあまりの一語にショックを受け、愕然としました。青年僧だった道元にとっては思いもかけない痛棒だったのでしょうか。このことは言い換えれば、過去は決して取り戻せない。現実の確かなことは「いまここ」にしかないという教えなのです。老僧が自分の健康のことや暑さのことなど全く無関心に、ひたすらあるがままの「いまの瞬間」に心を尽くしていることを道元は実感しました。老僧の実践は実に禅の瞑想実践と少しも違いがないことを理解するに至りました。いまここにひたむきに生きるという実践は誰もが日々の生活を人間らしく生き抜くことのできる智慧なのです。「究極の静謐の心」とは自然に

あるがまま自由に生き、障害物もなく諸々の欲望に負けることもなく、また卑下することもない、思いやりの心をもって、誰に対しても優しい言葉で話しかけ、他人のためになることをよるこび、感謝しつつ唯頻々と奉仕の念に満たされるという在り方なのです。

私たちが今日痛切に必要としているのは、「智慧と思いやり」の心であり、生活上の一体化なのです。この実践は継続的になされる「仏教心による不断の実践」（日本語で「行事」）であり、この意味するところは日々の生活が瞑想であるということなのです。また、私たちの目の前にある世界は、それがなんであれ、私たちが仏教の実践に身をゆだねることのできる修行の寺院である、ということなのです。言い換えると、真の教育はただ大学の教室での形式的な教育だけでなく、また、大学在学中の年月に限られたものでもなく、「止むことがない」ということなのです。

す。年齢を問わず、どこに居ようと（家庭・職場等々）仏教徒の生活は仏道実践の場なのです。

3. 正しい生活

道元が海路中国に渡ったのは一二三三年。港に着いてもなおしばらく停泊する船に留まって語学の習得に取り組みます。そんなころひとり老僧が舟に椎茸を買いにやってきます。道元にとっては、はじめて見る彼の国の僧侶です。自室に請じてお茶をふるまう。道元は、僧院には料理する他の僧侶もいるはずだと考え、しばらくゆっくりしてゆくように頼みます。ところが彼は名刹 Ayuwang 山（愛育王山）の料理長だったのです。椎茸を買うため一日がかりの距離を徒歩でやってきた。しかし、老僧は道元の頼みを拒むのです。あなたのような尊い老師が、瞑想や公案研究に打ち込まず、なぜ未だ料理な

どしているのかを尋ねる、料理長は云う。「外国の人よ、未だ弁道を解せず、未だ文字を知り得ず」と。きつく窘む。道元は自分の未熟さに確と気づき反省する。しかし、更に問う「如何があらんかこれ文字、如何があらんかこれ弁道」。しかし老典座は応えず、解けねばわが寺へ来い、と立ち去ったのです。

この経験は、道元の記憶に生々しく残り、のち（一二三七年）完成した彼の「典座教訓」（料理人向け指導書）に記録されています。このマニュアルは、僧院料理人が他の修道僧たちに食事を与える正しい方法について道元が記したものです。同時に料理を通して他人の肉体の栄養補給のみならず精神の安寧のためにも責任を持つ料理長に要求される態度にも言及されています。「典座教訓」によれば、手に入る材料がどのようなものであれ、可能な限り最善の食事を作ることが料理人の務めとあります。今日この

洞察が「日本の食文化の原点」になっています。茶道も然りです。

仏教の精神性には、意識の実践において見出された「洞察と思いやり」の質を以って世界と係わりあう能力と瞑想の内的規律とが共に含まれます。故に「禪の料理人」になるために学ぶことは、自分の性癖から自分が生きている社会環境に至るまでのあらゆるものを含めて人生に存在する「材料」に光を投げかけることを意味します。「材料」に対するこの注意関心は、人生自体の糧を提供するために、即ち、世界と精神的に係わりあうために、これらの素材や原材料を巧みに使うことができるようになった出発点なのです。

自己を発見する課程において、世界との係わりあいは、キリスト教における職業あるいは天職の考えに相当するもの、即ち、仏教でいう「正しい生活」の概念で理解されるものにつながり

ます。正しい生活というのは、世の中で正しく身を処する在り方として、いかにして暮らしていくかという点に関し仏陀が示した伝統的仏教の八重の道、第五番目の輻やうなのです。仏教の実践は、全体として仏教の教義によって導かれる仕事や生涯職として、自己の経済的な生計に反映するための信仰治療者を必要とします。生涯職での成功とか金儲けが唯一最大の目的であるような教育モデルではなく、仏教徒としての教育への取り組み態度は、この精神、道徳的領域を包摂するものでなければなりません。

伝統的に仏教経典においては、正しい生活というものは、仏教の第一義を犯すという理由から生命を奪うことを認めていない。したがって仏教の道は究極的には苦悩の軽減にかかわるものであることから、積極的には、あらゆる存在物の生命を良くすることに役立つ生涯職を選ぶべきことを意味します。仏教は限りなく「生活

の全て」、人間としての生き方即ち処世術として考慮すべきものと心得ます。この道は努力すべきある種の抽象的な理想というよりは、むしろ人が持つて生まれた素材を「調理」することから生まれてくる人の道なのです。生得天賦の才能が何であれ、それを自分とこの世との係わり合いにおいて如何に正しく表現するかということです。即ちこれが仏教への説得力なのです。

このように真の教育というものは仏教界のあらゆる区分を越え、また他の諸宗教伝統の間を突き抜けて伸びる道であります。それは智慧や思いやりと融け合い、自己の真の性質やこの世の苦悩の軽減のために捧げられる全体的な学問観なのです。真の世界平和を実現し、地球と調和し、希望の光を未来に輝かせるもの、それは「仏教に根ざした真の教育」というこの精神なのです。

この論文は、黒田老師が二〇〇四年九月、アメリカ・ハーバード大学で行う予定だった講演会の予定稿です。従っていまま少し手を入れ、熟慮して、完成されなかったのではと思います。原稿用紙に走り書きのままを載せています。病気が六月に見つかったため結局これが遺稿となり、講演は叶いませんでした。

中興二世 大圓武志大和尚の足跡

■略 歴

- 一九三八年 栃木県大田原市に生まれる
一九六〇年 駒沢大学卒業
一九六二年 駒沢大学大学院修士課程修了
一九六二年 大本山総持寺特別僧堂に安居
一九六五年 タイ・ワットパクナムで修行
一九六八年 北米曹洞宗開教師任命
一九六九年 長光寺住職任命
一九七〇年 長光寺より善光寺へ寺号変更
一九八二年 「釈迦殿」を建立
一九八五年 善光寺留学僧育英会を設立
一九九八年 スリランカのサラナンダ財団より
国際栄誉賞を授与される
一九九九年 「横浜やすらぎの郷霊園」開園
二〇〇一年 駒澤大学より仏教興隆の功績を認め
られ曹洞宗特別奨励賞を授与さる

■講 演

- 二〇〇一年 京都清水寺に瑩山禪師顯彰碑建立
二〇〇一年 曹洞宗大教師補任
二〇〇二年 大本山永平寺道元禪師七五〇回大
遠忌焼香師として拝登
二〇〇四年 十二月二十九日 遷化 世壽六十
七歳
- 一九九七年 日本テレビ「心柔らかに今を生き
る」
一九九八年 NHKラジオ「心の時代」
二〇〇一年 日本能率協会「人材育成と私の使
命」
二〇〇二年 ドイツの禅協会、直心会、大悲山普
門寺におけるシンポジウムにて講
演、解説・ニードアルタイヒ修
道院を訪問し、聖体拝受の儀式に
参列、そして、同修道院院長と異
教徒間の対話について話し合った

二〇〇二年 タイ バンコクの世界仏教徒連盟

二〇〇二年 共著「道元の二十一世紀」東京書籍

(WFB)にて講演(世界仏教徒青年連盟の招請による)演題「坐禅の

「道元思想から見た現代社会への
アプローチ」

姿がそのまま」

二〇〇三年 日本スリランカ国交樹立五〇周年

記念 友好親善使節団団長としてス
リランカを訪問した際(スリラン
カ教育文化大臣よりの招聘による)
世界平和祈願コロンボ大会に出席
し基調講演を行う。演題「ダルマ
パーラの贈り物」

■評論・小論

一九九一―二〇〇二年 横浜善光寺留学僧育英

会研究論文集刊行

一九八三―二〇〇二年 善光寺季刊誌「成寿」

刊行

一九九二年 「心やわらかに」佼成出版

一九九四年 「正法は海を越えて」

中興二世 大圓武志大和尚の足跡

■略 歴

- 一九三八年 栃木県大田原市に生まれる
一九六〇年 駒沢大学卒業
一九六二年 駒沢大学大学院修士課程修了
一九六二年 大本山総持寺特別僧堂に安居
一九六五年 タイ・ワットパクナムで修行
一九六八年 北米曹洞宗開教師任命
一九六九年 長光寺住職任命
一九七〇年 長光寺より善光寺へ寺号変更
一九八二年 「釈迦殿」を建立
一九八五年 善光寺留学僧育英会を設立
一九九八年 スリランカのサラナンダ財団より
国際栄誉賞を授与される
一九九九年 「横浜やすらぎの郷霊園」開園
二〇〇一年 駒澤大学より仏教興隆の功績を認め
られ曹洞宗特別奨励賞を授与さる

■講 演

- 二〇〇一年 京都清水寺に瑩山禪師顯彰碑建立
二〇〇一年 曹洞宗大教師補任
二〇〇二年 大本山永平寺道元禪師七五〇回大
遠忌焼香師として拝登
二〇〇四年 十二月二十九日 遷化 世壽六十
七歳
- 一九九七年 日本テレビ「心柔らかに今を生き
る」
一九九八年 NHKラジオ「心の時代」
二〇〇一年 日本能率協会「人材育成と私の使
命」
二〇〇二年 ドイツの禅協会、直心会、大悲山普
門寺におけるシンポジウムにて講
演、解説・ニードアルタイヒ修
道院を訪問し、聖体拝受の儀式に
参列、そして、同修道院長と異
教徒間の対話について話し合った

二〇〇二年 タイ バンコクの世界仏教徒連盟

(WFB)にて講演(世界仏教徒青年連盟の招請による)演題「坐禅の姿がそのまま仏」

二〇〇三年 日本スリランカ国交樹立五〇周年

記念 友好親善使節団団長としてスリランカを訪問した際(スリランカ教育文化大臣よりの招聘による)世界平和祈願コロンボ大会に出席し基調講演を行う。演題「ダルマ・パーラの贈り物」

■評論・小論

一九九一―二〇〇二年 横浜善光寺留学僧育英

会研究論文集刊行

一九八三―二〇〇二年 善光寺季刊誌「成寿」

刊行

一九九二年 「心やわらかに」 佼成出版

一九九四年 「正法は海を越えて」

二〇〇二年 共著「道元の二十一世紀」東京書籍

「道元思想から見た現代社会へのアプローチ」

■ 特集 2

白純老師二十七回忌

善光寺開山禰庵白純大和尚二十七回忌
当山二世中興大圓武志大和尚四十九回忌
第二十一回育英会育英生辞令交付式





▲東 隆眞老師
当山二世中興大圓武志大和尚
四十九日忌

去る二月十二日土曜日の午後二時から善光寺開祖棟庵白純大和尚二十七回忌及び昨年末に遷化された当山二世大圓武志大和尚四十九日忌、そして、大圓老師ライフワークの一つでもある海外留学僧派遣育英会の第二十一回育英生辞令交付式が善光寺釈迦殿で行われました。

まずはじめに行われた棟庵白純大和尚二十七回忌では、白純老師が中興し、生涯住職として守られた当寺本寺の大田山光真寺より住



黒田俊雄老師 開山榎庵白純大和尚二十七回忌

職黒田俊雄老師を導師に迎え、寺づくり人づくりの名人と唱われ多くの要職を歴任された老師の偉大なる功績を偲びながらつつがなく執り行われました。

同日に行われた当山二世大圓武志大和尚四十九日忌では、大圓老師の駒沢大学時代の学友でもあり、海外留学僧派遣遺育英会の理事を務められるなど、老師の同胞ともいえる金沢大乘寺住職東隆眞老師に導師を賜り、多くの僧や檀信徒、関係者の集まる中で、志半ばで遷化せられた大圓老師の魂の安寧を祈りました。また、四十九日忌に続いて、博志新任職への辞令宣読がありました。



そして、奇しくも老師が思いを託した最後の育英生の辞令交付式もこの日に行われました。博志新任職の導師で行われたこの式では、育英会理事宮本延雄先生より選定の結果報告がありました。こうした中で行われた辞令交付式は育英生にとってもひとときわ深い感慨が湧いていることでしょう。最後に、大乘寺住職東隆眞老師、光真寺黒田俊雄老師、善光寺総代から中村治雄様、東郷敏様、そして黒田博志新任職からご挨拶がありました。

■特集

白純老師二十七回忌

白純和尚の人と功績 大田山光真寺を訪ねて



光真寺の再建

大田山光真寺三十六世黒田白純大和尚は成寿山善光寺の開祖であり、亡くなられた二世大圓老師の父君にあたります。幼い頃、母親が当時の光真寺の住職雲南愚白老師と再婚し、その弟子となつて修行を積むうちに、愚白老師に目をかけられ光真寺の後継者となりました。

光真寺は昭和の初期に失火し、冬の強風に乗つて、寺だけではなく街までも焼失させてしま



光真寺 俊雄老師

光真寺縁起

当寺は、天文十四年（一五四五年）に創建された禪寺で、永平寺並びに総持寺を大本山とする曹洞宗に属し、大田山光真寺と称します。本尊は釈迦牟尼佛。
御開山は矢板市長興寺第三世僧翁麟道大和尚にて、宇都宮市成高寺の門下であります。
開基は、大田原家中興の祖である第十三代資清公で居城を中田原水口から大田原龍体山に移すを機に、両親の菩提を弔うため、この地を霊域と定めて七堂伽藍を建立された。寺号は父君の法号「明庵道光」の光と、母君の「真芳妙観」の真とをとり命名したと云われます。

光真寺縁起

ました。もともと大田原藩主の菩提寺であっただけに檀家の数は少なく、再建はなかなか進みませんでした。そこで藩主や家臣だけでなく、多くの檀家を集めるために白純老師はさまざまな事業を進めました。例えば、寺に図書館をつくったり、街に子供会をつくったり、夏になると涼しい気候を利用して、夏期休暇中の一高の学生を預かり指導者をつけて勉強を教えたりもしていたそうです。白純老師の後継者であり現在の光真寺の住職、黒田俊雄老師は「先住さんは仕事が好きで、社会事業を積極的に行っていました」とお話になられます。焼失した光真寺も昭和八年から再建がはじまり、一、二年後には本堂をはじめ徐々に再建が進み、光真寺の中興の祖となりました。

子を育て、弟子を育て

白純老師には八人の子どもが、しかし長男は



光真寺三門

幼いころに亡くなってしまったので、次男である俊雄老師が実際には長男のようになっていきます。この俊雄老師の下には、ロサンゼルス、曹洞宗禅センターで修行を積みロサンゼルスの仏真寺を開いた前角博雄老師、その下には一時一般企業に勤めながら僧籍に入った本清氏、会社社長の明義氏、武志老師、そして、東京桐が谷寺の純夫老師、さらに、東京芸大で彫刻を学び現在群馬大学の教授となっている能勝氏も仏像をつくることとその道に入らざるがけになっています。また、子どもたちのうち仏教界に進んだ五人は駒沢大学に学んだことも理由の一つといえるでしょう。

一方では実の子どもだけでなく多くの弟子を育て、慕われていました。そんな白純老師を俊雄老師は「人のことはよく面倒を見ましたが、子どもたちにはあまり口を聞きませんでした。弟子も子どもも面倒を見ている学生もみんな同



光真寺境内

じように面倒を見ていました。おそらく母親が再婚で、再婚するまでや子ども時代にいろいろと苦労したからでしょう」と回想します。「人づくり、寺づくり名人」といわれたのも、その面倒見のよさからでしょう。「母も偉かったと思います。父よりも先に寝たことはなかったのではないでしょうか。夫妻で大切にされた檀家の皆さん。それが現在の光真寺をつくっているのでしょう。」

大本山總持寺の再建に

光真寺の復興が落ち着いて来た昭和二十年代後半から白純老師は光真寺を俊雄老師に任せ、曹洞宗大本山總持寺の復興に力を注がれるようになり、「總持寺の大祖堂を再建するところ」に、周囲の人々から推挙されて本山の副監院になりました。在任中には大祖堂は完成しませんでした。その基礎はつくったと思います。その後、總持寺の顧問を長く務めただけでなく、

大本山總持寺復興局長、全日本仏教会事務総長、曹洞宗審事院院長、曹洞宗宗議会議員、駒澤大学駒沢会会長、国際仏教興隆協会常任理事、日本宗教連盟参議、栃木県仏教会会長などの要職を歴任し、全日本仏教会事務総長時代には新興宗教との対話など、宗門を超えた活躍も見られました。

「晩年まで總持寺の顧問をしていたので、光真寺に戻ってくるのは、お祭りとか大きな行事のときだけでした」。要職から退いて大田原に戻り約一年後、昭和五十四年二月四日世壽八十二歳をもって、黒田白純大和尚は遷化せられました。

生前、曹洞宗大教師、黄恩衣、赤紫衣の位を授与せられ、特に大本山總持寺西堂位を追贈されました。

俊雄老師は「兄弟の中でいちばん白純老師に可愛がれていたのが生前の武志老師だった」と



光真寺境内

お話になりました。武志老師はどんな些細なことでも父白純老師に相談をする。「いかなることでも父母の意志に違わず、敬愛し続け、兄弟の中でも孝道を尽くした第一人者だった」それだけに白純老師の可愛がりよりも特別だった。またその生き方は人を育て、人を立て、人を大切に、これこそまさに、白純老師の生き様にオーバーラップしております。

大田原市の市街地の一角に静かに佇む光真寺。

広い境内には大田原藩主の霊廟と小高い丘に広がる墓苑があります。その墓苑には白純老師の好きだったあじさい公園が大田原の街を見守るように位置しています。そして、本堂の前には能勝氏がつくった白純老師の胸像が建っています。



極樂善見寺
三光院

くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻——

その十

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

仏道の面授かくのごとくなる道理を、かつて見聞せず、参学なきともがらあるなかに、大宋国仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺の承古禅師といふものあり。上堂に云く、

「雲門匡真大師、如今現在せり、諸人還た見る麼。此の事、直に須く諦当して始めて得べし、自ら謾ずべからず。且く往古に黄檗の、百丈和尚の馬大師下喝の因縁を拏するを聞き、他の因みに大省せるが如し。百丈問ふ、子向

後、大師に嗣すること莫しや否や。黄檗云く、某、大師を識ると雖も、要且すらくは大師を見ず。もし大師に承嗣せば、恐らくは我が児孫を喪せん。大衆、当時馬大師遷化して、未だ五年を得ざるに、黄檗自ら言ふ、見ずと。当に知るべし、黄檗の見処円ならず、要且すらくは祇だ一隻眼を具するのみ。山僧は即ち然らず、雲門大師を識得し、亦た雲門大師を見得し、方に雲門大師に承嗣すべし。祇だ雲門の如きは、入滅して已に一百余年を得たり。

如今作麼生か箇の親見底の道理を説かん、会す麼。通人達士は、方に証明すべし。眇劣の徒は、心に疑謗を生ず。見得は之を言ふこと
在らず、未見の者、如今看取すや不や。請ふらくは久立珍重。」

いまなんぢ雲門大師をしり、雲門大師をみることをたとひゆるすとも、雲門大師まのあたりなんぢをみるやいまだしや。雲門大師なんぢをみずんば、なんぢ承嗣雲門大師不得ならん。雲門大師いまだなんぢをゆるさざるがゆゑに、なんぢもまた雲門大師われをみるといはず。しりぬ、なんぢ雲門大師といまだ相見せざりといふことを。

七仏諸仏の過去・現在・未来に、いづれの仏祖か師資相見せざるに嗣法せる。なんぢ黄檗を見処不円といふことなかれ。なんぢいかでか黄檗の行履をはからん、黄檗の言句をはからん。黄檗は古仏なり、嗣法に究参なり。なんぢは嗣法

の道理かつて夢也未見聞参学在なり。黄檗は師に嗣法せり、祖を保任せり。黄檗は師にまみえ、師をみる。なんぢはすべて師をみず、祖をしらず。自己をしらず、自己をみず。なんぢをみる師なし、なんぢ師眼いまだ参開せず。真箇なんぢ見処不円なり、嗣法未円なり。

なんぢしるやいなや、雲門大師はこれ黄檗の法孫なることを。なんぢいかでか百丈・黄檗の道処を測量せん。雲門大師の道処、なんぢなほ測量すべからず。百丈・黄檗の道処は、参学のちからあるもの、これを拈挙するなり。直指の落処あるもの、測量すべし。なんぢは参学なし、落処なし。しるべからず、はかるべからざるなり。馬大師遷化、未得五年なるに、馬大師に嗣法せずといふ、まことにわらふにもたらず。たとひ嗣法すべくは、無量効のちなりとも嗣法すべし。嗣法すべからざらんば、半日なりとも須臾なりとも、嗣法すべからず。なんぢすべて

仏道の日面月面をみざる暗者愚蒙なり。

〈現代語私訳〉

仏道における面授のありようは以上のような道理であるのに、そのことをかかつて見聞したこともなく、また身心を打ち込んで学んだこともない輩があつて、その一人に、大宋国は仁宗皇帝の時代、景祐年間に、薦福寺の承古禪師という者がいた。ある時、法堂での公式説法で述べた記録が残っている。

「雲門の匡真大師（九四九寂、生年不詳）

は、いまもここに在します。はたしてみなさん、見ることができるかどうか。もし眼前に彷彿とすることが出来るなら、私と同じ境界である。どうだ、見えるか、見えるか。このことがすつとほぞおちしてこそまっとうな修行だ。ただし、自分をごまかしてはならぬぞ。

とりあえずこれは、むかし黄檗が、その師

百丈和尚が馬祖道一の弟子（百丈）に対する叱声「喝」を發するいきさつを語るのを聞いて、大いに反省し得るところがあつたという故事を彷彿させる。

百丈が（黄檗に）問うた。《そなたは、馬祖大師の法を嗣ぐ気があるかどうか》と。

黄檗は答えた。《私は、馬祖大師を承知してはいます。しかし、お目にかかったわけではありません。もし私が大師の法を嗣ぐようになれば、（面授せずに法を嗣ぐことになって）おそらく私の法を嗣ぐ兒孫は絶えるに違ひありません》

修行者たちよ、その当時、馬祖大師がなくなられて五年も経っていなかった。それなのに黄檗はみずから、会っていない、という。このことからほつきりするではないか。黄檗の見るところは少々欠けたところがある。言うなれば、片目しか開いていないのである。

その点、私は違う。雲門大師をよく承知しているし、雲門大師にお会いしたのであり、また雲門大師の真髓を会得し法を嗣いだのである。ただ雲門大師は、入滅してすでに百年余り経つ。それを今にしてどうして親しくお会いしたと言えるのか。おわかりか。この道理を心得た者は、その点を明らかにすることが出来るであろう。目のかすんでいる輩は、心に疑惑を生じてしまう。だからとても雲門大師に会うことは出来ない。まだ見ていない者はどうだ、今、会えるかどうか。

長時間にわたり、立っついてもらって、御苦勞であった。」

今、なんじ（承古）が雲門を知り、雲門大師をまのあたり見たという話が本当だと信じることにしても、はたして雲門大師の方は親しくなんじを見たのかどうか。雲門大師がなんじを見ていないなら、なんじはあれこれ言ってみても

雲門大師の法を嗣ぐ弟子にはとてもなれない。雲門大師は、まだなんじを許していないのだから、なんじもまた雲門大師は自分を親しく見たとはとても言えない。それではつきりする。なんじは雲門大師とまだ目見えてはいないのである。

（永遠の過去から釈迦牟尼仏に至るまで、仏のいのちを伝えて来た）七仏をはじめとして、過去、現在、未来にわたるあらゆる仏祖の中で師と弟子が相見えることなくその法を伝えたという例外はあるまい。なんじは、黄檗に関して「見るところが完全ではなかった」という評価をすべきではない。なんじに、どうして黄檗の生きざまを云々できようか。黄檗の言句の真意がわかるるか。黄檗は古仏として尊ばれる存在だから、嗣法のこととはよくよく承知だ。ところが、なんじは、嗣法の道理を夢にも見たこともあるまいし、実際に修行の場で学んだことも

あるまい。黄檗は、その師の法をきちんと嗣ぎ、祖師としての地位を保っておられる。黄檗は、その師に直接まみえ、その師を親しく見たのである。なんじはいっさい師を見ておらず、祖を知らないのである。自己を知らないであり、自己を見てもいない。なんじを見る師はないし、なんじが師を見る眼も開かれてはいない。まさしくなんじの見るところは完全ではないし、嗣法も充全ではない。

なんじは知っているかどうか、雲門大師はまっとうな黄檗の法孫だということを。なんじは、どうして百丈や黄檗のいうところを思いはかることが出来ようぞ。雲門大師がいうところをなんじはやはり思いはかつてはならぬのだ。百丈や黄檗のいうところは、正しく師に就いて修行力を身につけた者がこれを語ることが出来るのだ。修行の勘どころを端的に示し得る者にしてはじめて云々することが出来るのだ。なんじは

正しい師について修行していないし、勘どころをほぞおちさせていない。しることも出来ないし、想像すら思いもよらぬことだ。(黄檗が)その師である馬大師が亡くなって五年足らずであるのに、馬大師の法を嗣いでいないという。これは、まことに笑い話にもならない。もし直接の出会いがなくて嗣法が出来るのなら、無限の過去の祖師の法を嗣ぐことが可能である。直接の出会いのない師の法を嗣ぐことは不可能だとすれば、半日とか、ほんの一瞬とかのすれ違いでも嗣法は出来ない。なんじは、仏道の何たるかをまったく知らないあんぽんたんであり、たわけ者である。

いのちは観念ではない

面授の巻の示衆は、寛元元年(一二四三)十月二十日。ところが、それから間もなく、追補

ないしは補遺に相当する部分が書き加えられた
 ようです。

「面授」の巻の冒頭で、インドの靈鷲山りょうじゆせんの集
 会で、優曇華うとうげを手にして微笑された時、摩訶迦
 葉尊者が破顔微笑、釈尊がすかさず「われに正
 法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付属す」と宣
 言された故事が語られています。実は、この故
 事が「面授」の巻の主題です。

「正法眼蔵」と言い、「涅槃妙心」と言い、或
 いは二句を連結して「正法眼蔵涅槃妙心」と言っ
 ても殆ど同じことを表現しています。釈尊の仏
 法の真髓のことです。仏道の眼目と言ってもよ
 いでしょう。もちろん目に見えるかたちはあり
 ません。言ってみれば、とらえどころがないも
 のです。そういう意味では、涅槃妙心という表
 現は、その本質をついていると言ってよいでしょ
 う。私たちはうっかりすると、「心」の中にそれ
 を認めたくなくなるようなイメージを抱きます。つ

まり、仏のいのちを観念的にとらえてしまいが
 ちなのです。

しかし「心」とは異質なのです。それゆえに
 私たちの感覚がとらえる「心」とは区別して「妙
 心」と言います。からだ全体に「蔵おぼろめ」られたも
 のと言った方がよいかもありません。

それにしても、目には見えませんから、語録
 を読んだり、口承によるエピソードなどを伝え
 聞いて、古人の人となりを知り、それと自分の
 心境を重ねあわせてその「心」を類推すること
 は出来ます。それによって、修行体験で得た自
 分の心境がその古人とまったく同じだと錯覚す
 ることもあり得ます。

ここで取りあげられている承古禪師のエピソー
 ドは、まさにそのような間違いを犯しているわ
 けです。直接に面かほと面とを合わせてこそ面授で
 あり、嗣法（仏のいのちを伝えること）なのだ
 ということを特に念を押ししておくためには、恰

好の具体例だと考えられたのです。

電子情報の危険性

ちなみに、雲門文偃ぶんえんは、雪峰義存ぎふく（八二二―九〇九）の法を嗣いだ弟子で、雲門山に三十余年住して弟子を鍛えたと言われています。いわゆる雲門宗は、南宋以後は衰微しますが宋代には臨済宗と並んで栄えたと言われています。

それぞれの生歿年をみればおわかりのように、雲門大師が歿して百年以上経って、承古は生まれています。直接に顔を合わせることは不可能です。面授面受は成立しません。それなのに「自分は雲門の直弟子だ」と言うのは、例えば私が道元禅師の語録とか著作とかを読んで深い感銘を受け、悟りを開いたような気分になったから「自分は道元大和尚の嗣法の弟子だ」と広言するようなものです。

面授面受というのは、一種の双方行為です。自分の判断で、あの人のすべての生き方がよく理解でき、その教えの通りに生きていくことが出来る、と弟子が一方的に宣言するだけではダメなのです。師の方が弟子の眼を視ながら「お前は、まだ不充分なところもあるが、まあ、この調子でやって行けば何とかなる」と弟子の生き方を認めてこそ面授面受が成立するのです。嗣法というのは、そういうものなのです。

現代の問題でこのことを考えてみます。このごろコンピューターが全盛で公私を問わず国中の人々がインターネットで情報を交換しています。或いは、携帯電話やEメールでの交流が日常的になっています。

しかしこのような機器を介しての情報の交換では嗣法は不可能です。直接に眼を視、面かおを見していないのだから当然の話です。たとえ、現在生きている人であっても、ケイタイやメールで

教えを乞うだけでは、自我肥代の度を増すだけです。メール上の文字を追いながら、自分に納得した考えだけを受け入れ、気に入らぬ考えは無意識のうちに（或いは意識的に）無視してしまうのですから当然そうなります。面授面受はおよそ不可能な話です。

このごろ布教教化の手段としてインターネットのホームページを立ち上げたり、メールを積極的に活用する青年僧たちが多勢います。しかし、電子機器を利用して仏法を説くことは邪道ではないかという懸念を抱きます。

特にインターネットの双方向性の機能がくせものです。画面上に質問等を入力すれば、即座に（或いは、時を置いて）その画面上に出現するという擬似臨場性が問題だと思えます。画面上で応答をくり返しながら「雲門大師を識得し、また雲門大師を見得し、まさに雲門大師に承嗣した」と同質の気分が陥ってしまうのです。

それは、面授を重視する立場からは徹底否定されるべきです。インターネットのやりとりでは、「なんぢはすべて師をみず、祖をしらず」というそしりを免れないのです。さらには、つまるところ「自己をしらず、自己をみず」ということになってしまうのです。

私は、インターネット文化の進展に、人間の危機を感じています。バーチャル・リアリティ（仮想現実）の問題を含めて、面授面受を忌避する傾向のある現代社会に大いなる警告を発しているのが「面授」の巻なのです。

秋彼岸法会

九月二十一日、善光寺では恒例の「秋彼岸法会」が行われました。当日は七〇〇人の檀信徒の皆さんが全国から集まり、午前十時からの午前の部も午後一時三十分からの午後の部も釈迦殿がいっぱいとなる盛況でした。

また、昨年の春の彼岸法会に引き続き、駒沢大学名誉教授・佐々木宏幹先生に特別法話をいただきました。佐々木先生にはレジュメ（要録）をご用意いただき、このレジュメに沿ってわかりやすく日本人の自然感覚や死生観を通じて「無常」について、お話をいただきました。その興味深い内容に、一時間にわたる法話にも檀信徒の皆さんは熱心に耳を傾けておられました。



善光寺秋彼岸法会 特別法話

無常観

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

次の世界へ旅立つ

ご縁がありまして、昨年三月十八日、春のお彼岸に『彼岸について』というお話を皆さまに申し上げます。今回はそれに引き続いて、「無常観」をテーマにお話をさせていただきます。

無常というのは、いうならばこの瞬間、瞬間の移ろいです。このごろメディアでは若さを保つとか、五十代の人が三十代の若さに戻るとか宣伝していますが、仏教では「生まれたものは必ず年を取る」、年を取ったものは病にかかりや

すくなるので、この世にどんなにしがみついても、やがて「さよなら」とすると説いています。それを「生老病死」といっています。

それで、お坊さんであろうと一般の人であろうと、国王、大臣であろうとも、その「無常の風」は人間だけでなくあらゆるところに吹いてきますが、これにかなうものはありません。無常の風が吹いてくると、それを助けようがない。どくへ行くか。仏教では仏様の国に行く。そしてここにお祈りしてあるお釈迦様と同じような平安な境地になる。その平安な境地がこのご

本尊の姿形に現われているわけです。拝まれたあとに、じっと仏像を見ておりますと、「いいお顔だなあ」と皆さまはお感じになると思います。

この世にある間、ああいう表情になるということはよほど修練し、修行をしないとできません。しかし、亡くなった後は、この世の欲得づくめのものを全部捨て去ってしまいますから、仏教の立場から見ればまさに、お釈迦様のところへ旅立つのは、不幸な話や悲しいことではななくて、そのとき初めて、我々の執着（しゅうじやく）とか欲望とかとおさらばして次の世界に船出していくことができるのです。

次の世界、それはどこか。仏教徒であれば、お釈迦様のところに行くということになります。ここにたくさんのお塔婆がありますが、お釈迦様のところに、今、向かいつつある方々に対して、この世から功德をつんで回向するわけです。

功德というのは一種の力でありますが、その



力を亡き人にめぐらし向けるというのが、回向です。功德を回向する。皆さまがお寺にお集まりになって、手を合わせ亡き人を思い、その人がどうぞあの世で安泰でありますようにと、心から願いを込めたものが、この塔婆です。お墓に行つてこれを建てて、「どうぞ安らかに仏道修行してください。お釈迦様のところへ行つて下さい」と語りかけるのも彼岸のあり方の一つだ

ろうと思います。

今日は一日だけ

「最期の時」には、いろいろな生き方があります。日本にも二度来ていますが、アメリカの有名な医学博士キューブラー・ロスは、『死ぬ瞬間』という本に死ぬ際にはいろいろな苦しみがあっても最後は「非常に澄んだ時間がそこに訪れる」といっています。

アジア的な感覚ですと、広い野原にタンポポとか、スミレとか花がたくさん咲いている。そのようなところへ最後はすーっと行くというのです。黄金色の光がすーっと射してきます。だから死ぬことは恐ろしくありませんと、それがキューブラー・ロスの結論です。

どうして死んだこともない医学博士がそんなことを言えるんだと思うかもしれませんが。ところが医者さんから「亡くなりました。ご臨終

です」といわれたのち、三日、四日とか長いと十五日ほど経って、ひよっとこの世に戻ってくる人がいるのです。臨死、死に臨んではいるのだけれども、もう一回戻ってくる。お医者さんが「もうこれはダメです」と言った人が、「何日か経って戻ってくる」ということがあるのです。

ハッとして意識が戻る瞬間。研究者は臨死体験には二つあるといいます。仏教が広がるアジアでは、「あの世」はきれいな牧場のように広くて、草や花がたくさん咲き、そして小鳥がさえずっている。そこにあたたかい黄金の光がすーっと光っているところに行く。ところがキリスト教のヨーロッパやアメリカの臨死体験をみるとそれは逆です。暗いトンネルをすーっと垂直に落ちていくのです。これをトンネル体験と言います。どうしてなんだらう。宗教の違いがあるの世の違いにも表れているのではないか。ご存知のように亡くなることをキリスト教では「昇

天」といいます。天空遙か彼方の神のいるところまで昇っていくからです。われわれは「逝去した」です。「逝」も「去」も「行く」です。「ここを去る」ということです。仏教やアジアでは、あの世というのは水平の彼方にあるということと、花が咲いた草地であるということです。

今日の話は日本人の「無常」の感覚についてです。「無常」というのはお釈迦様がお悟りを開いて世界全体の真理に領かれたことの中味です。これがお悟りです。

「無常」という言葉は仏教の基本的な教えで、人間でも、動物でも、植物でも、つくられたものでも、一切のものはことごとく生滅してとどまることなく、移り変わるといことです。「当たり前」といいながらも、なかなか私たちにはこの当たり前を深く自分で納得するということとは難しいものです。

あらゆるものが留まらない、この瞬間にも動

くということが真理であるから、生まれたものは「さよなら」するのは当たり前です。ところが私たちはそれを頭では理解しても、どこか吹っ切ることができません。永遠に若さを保ちたい。そこで医学も、それから諸科学も、人間の命を長くもたせるためにさまざまな研究をしてきました。女性でしたら、お化粧とか、食べ物をご用意すれば若さを保てるのかです。このごろテレビのコマーシャルを見ていても、特別なクリームを使って化粧をすると、ほんとうにこの人は七十代かなと思うほど変化します。メディアの宣伝ですから、効果も個人によって違うはずですが、そういう努力をしても、「所詮ダメな時はダメ」そういう見定めましようというのがお釈迦様の結論でした。

ところが私どもはその見定めがなかなか利きません。ですからお医者さんから「自分の奥さ

ん、旦那さんの延命装置をどうしましょうか」と聞かれたときに「延命装置なんていらぬ、自然に死んでいくときは死んでいく」といい切る人が日本人には非常に少ないのです。ダメだっていわれてもなおかつ少しでも生きたいという意志です。他面そういう意志があるから、この辛い浮き世を生きていけるのです。

しかし、辛い浮き世で生きてても、必ず人間はこの世にさよならしなくてはならないというのがお釈迦様の結論です。そして、「いつかさよならをしなくてはいけないのだから、今日一日とかこの一時間とかいうのが非常に大事ですよ」ということなのです。いろいろな職場によって辛さもあれば楽しさもあるのですが、今日は今日つきりと思っ生きていければ、その意味が違ってきます。自分が納得する人生の意味です。

仏教にもいろいろな解釈がありますが、しかし大筋では「人生の無常」という点で一致して

います。「無常だからこそ努力をしなければならぬし、諦める時には諦めなくてははいけません」。仏教はこのことをいろいろな角度から述べているのです。

多神教と日本人の死生観

日本の仏教はインドに生まれて日本で育ったものです。今、日本では九五%ぐらいの人が仏教徒です。そして、その人たちが同じように神道の人たちでもあります。つまり、仏教を拝みながら、最寄りの神社の神様も否定しないで、元日や七五三にはそちらにも行きます。仏教も神道もどの宗教が正しく、どの宗教はダメとは主張をしません。

一方で、「一つの宗教は絶対だから、あとのものはみんな間違っている」というのが、キリスト教やイスラム教、ユダヤ教などのような一神教といわれる宗教です。今でもイスラム教であ

るイラクの人々はスンニ派とシーア派の二つに分かれて戦っています。車に爆弾を積んで、人が集まっているところでドカンと爆発させる。あの仕方は、仏教からは原理的に出て来ませんし、出にくいのです。一つの神をたてることは純粹です。そのかわり他を排除しなければ、純粹性は保てません。だから、他の神様はみんな異教徒になってしまうのです。ところが我々は神道の神様をみても八百万の神を拜んでいます。神々をちよつと数えても八百万もある。そこにインドから中国経由で来た仏様がたくさん加わった。諸仏諸菩薩や仁王様や諸天を入れれば、すごい数になります。そこで喧嘩が起こったでしょう。喧嘩をしません。

円空仏をご存知ですか。円空という僧があちこちに泊まったお札に仏様を木に彫って、残しました。中には重要文化財級のものもあります。古い木に仏像を彫るのですが、日本では古い木

には神様の魂が宿ると教えられています。古木にしめ縄を張るのは、「ここに神様がいます」という印です。ところが円空はその古木にお釈迦様や阿弥陀様や地藏様の像を刻みました。神を体とする樹木に仏さんの魂を埋め込んだのです。これは一神教ではできません。だから円空仏は神仏仲良く、神様と仏様と一緒にした神仏習合ということを象徴しています。そして、それはいかにあの世が自然と同じかというところに重なってきます。つまり、日本の仏教はあの世を「大自然」に見いだしました。日本には五〇〇年代に仏教が入ってくるのですが、それ以前から大自然の中に神様を見いだしていました。その例をあげると、昔、日本人は亡くなった人は最寄りの里山へ行って住むと考えていました。今でも奈良県あたりで見られますが、農村地帯の田んぼの周辺にある集落の背後のあまり高くない山、その里山の中ぐらゐのところに穴を掘っ

て死者を埋めたのです。そうするとそこから亡くなった人が村の自分の生まれたところ、あれが本家で、これが別家、あれが孫別家…と見ていて、そこで長男、次男が果たして田んぼをきちんと耕しているかを見ているのです。ニューギニアの先住民族も、亡き人は少し高みに行つて穴を掘つて埋めますが、お正月とお盆には、そんな亡き人が戻ってくると考えています。そうすると里の人がご馳走をたくさん用意して、歓待をするという風習がずっとあります。

日本も同じです。自然の中で霊界に行つたものとこの世の社会に残つたものの交流が生まれます。それを仏教では「感応道交」と呼びますが、その通じ合い、コミュニケーションする間にあの世に行つた人々が、仏様だとか、神様の子どもとしてだんだん成長していく。ちょうど生まれた赤ちゃんが両親に育てられて大人になるように、あの世に生まれた仏の子どもたちは、

この世から回向されて、いろんな功德をおくられて、あの世で仏様へと成長していくのです。

山形では死者が近くの山に集まって、二十年、三十年かけてだんだん成長すると、月山や湯殿山や鳥海山など、二〇〇〇m、三〇〇〇m級の山に行つて、そこで神になるという信仰があります。そのように、亡き人がだんだん先祖になり、神になるところに仏教が入ってきて、仏教の力によって、今まであった「あの世」観、つまり山に行つて、あるいは野にいて、そしてだんだん神になるというのを仏になるにしました。それを「日本仏教の自然感覚」と考えています。仏教の伝来により、「この世というのは何か、あの世というのは何だろうか」という大昔からの死生観に変化が生じます。そして、死者が行く山は「浄土」や「地獄」という名前に変わっていきます。それを学問の上では「山中他界観」といいます。海拔一八〇〇mとか二〇〇〇mの

山へ行くと、高山植物がある季節にバアッと咲きます。東京や横浜あたりの人口過密地帯から行った人は「ワァー極楽みたい」と思わず感じてしまいます。昔の人々もあの空気の澄んだ山間の原をみて「ああ、仏様が住むのはこういうところか」とイメージしたのでしょうか。だから、浄土が原などと呼ぶ。浄土というのは最も清まった土地で、西方、西のかた、十万億土にあると仏教では教えました。十万億土といえば、天文学的数字です。インドではそれを教えました。ところが日本人はそんな天文学的な数字を感覚することができませんでした。お浄土をすぐ近くの二〇〇〇m、三〇〇〇mの清らかな山の上に想定したわけです。ですから、「浄土が原」とか「阿弥陀が原」とか呼んだり、火山が吹き出すような硫黄の臭いのするところを「地獄谷」「賽の河原」といい、子どもが亡くなった時に、そこで石を積んでいると鬼がやって来て、蹴っ

て転がしてしまふ。このような伝承を生み出してきました。

栄枯盛衰と自然の摂理

「常がない。あらゆるものが生まれたら滅する。必ず生滅、生滅を繰り返していく」という日本の仏教の「無常」。非常に冷徹な哲学を日本人は自然に重ねて感覚しました。お米でも大根でも麦でも、春はこの世に人間が誕生するのと同じように若々しい芽がエネルギーに萌えて、夏になるともつと盛んにイキイキとして、秋になると子孫を残して、冬になるとさよなら。これが自然の春、夏、秋、冬ですが、それに重ねて仏教は「生、老、病、死」ということを教えました。「自然の移ろいに生死（しようじ）を見る」。自然の移ろいと人生の真実とが重なっている。大自然の中に人間の奥深いありようを見ているという宗教者はたいへん多いのですが、

ここでは曹洞宗をお開きになった道元禪師の和歌をご紹介します。

春は花、夏ホトトギス、秋は月、
冬雪冴えて涼しかりけり

この涼しいというのは、普通の涼しいではなくて、寒いとか、冷たいという意味が込められています。鎌倉時代の意味です。春は爛漫と花が咲く。夏はホトトギスが鳴く。秋は月が美しい。澄んだ大空に月が浮かんでいるさまに、美学のようなものを日本人は認めています。そして、冬は冷たい。このことを道元禪師は「本来の面目」と書いているわけです。本来というのは本々とか本物の本です。面目は、本来の姿、真実の姿という意味です。そうすると真実の姿というのは、春は花に象徴され、夏はカッコウやホトトギスに象徴され、秋は月の美しさ、冬

は雪の降る姿…。「季節それぞれの姿が真実を表している」というのが道元禪師です。

良寛さんをご存知ですね。良寛が六十四歳の時に詠んだ俳句があります。当時は人生四十とか五十の時代ですから、六十四歳といったら大年寄りですが、

六十四年夢裡に過ぐ、世情の栄枯は雲の往還
自分は今年六十四歳になったけれども、過去を振り返ってみたら、夢幻のように過ぎたなあ。ここまでは我々もそうですね。六十年、七十年、いちいち覚えていられないけれども、それを顧みてひと言にまとめるとなれば、「夢みたいに生きた。苦勞もあつたし、楽しみもあつた」と、なります。そこまでは人生を反省しているので、世情の栄枯があります。この世の中の栄えたとか、衰退したとか…。大会社が景気がい

い、ところがバブルがはじけたら、全てつぶれていく。栄枯盛衰です。その栄枯盛衰というのは、社会的な事実なんだけれども、それを大自然の営み、雲が静かに動いている、あるいは風が吹いて急に動いている、それにのせて境地を詠んでいるわけです。この世の中には不幸もあれば、幸福もある。けれども、幸せだろうが不幸だろうが、みんな翩翩と浮かんでおって、流れに従って、雲は風のままに動きますから、雲の去ったり、来たりするの同じだと詠んでいるのです。同じく良寛の俳句に

裏を見せ、表を見せて散る紅葉

があります。良寛は修行を積んで、六十四、五歳でこの境地に至ったのですが、我々にはなかなかできないものです。我々は表を見せたい。下に着ているものは地味なもので、人目につ

く上着だけはきれいな恰好をしたいと、誰しもが思っています。「飾りたいし、いい面を見せたい」。なんとなく後ろめたいところは隠しておきたい」のが、この世の人生です。ところが良寛のようになると、「裏も表も見せる。素っ裸に生きていこう」。それを紅葉にたとえて、葉は綺麗な表だけ見せているのではなくて、裏表全部を見せているのだ、ということです。

『葉っぱのフレディ』の無常観

不思議なことに、カリフォルニア大学で哲学を教えていたレオ・バスカーリアというイタリア系の学者が仏教や日本人の人生観や無常観に近い形の童話を書き残しています。彼は何年か前に七十四歳で心臓麻痺で亡くなったのですが、心臓を悪くしてからアメリカや世界の子どもたちのために「生きる、死ぬ」ということをわか

りやすく残しておきたいと考えて書いたものが、それです。

春になると葉っぱが萌え出てきます。楓なのですが、楓が春には小さな芽を出して、その幹からどんどん葉っぱが増えてくる。夏になるとそれが濃い緑になる。秋になると黄色くなって、霜が降りくると落ちて死んでいく。そしてまた、来年の春になるとその落ち葉が肥やしになって、次の葉っぱが出てくる……。葉っぱの命の循環を人間に例える、擬人法といいますが、その一枚の葉っぱがフレッドです。それをフレディと呼びせています。霜がだんだん降りてくると、一枚一枚葉っぱが散っていくわけです。散っていくことは死んでいくことです。人格を与えられたフレッドも、あたりを見たら、風がすーっと吹いて来たら、また一枚、あの友達も往ってしまった。元氣そうにしていた葉っぱくんもいなくなりました。フレッドが話をしている相手がダニ

エルという兄貴分ですが、「春、夏、秋とよかったけれども、冬をひかえて死ぬの嫌だよ」と、駄々をこねるのです。そのとき、ダニエルがフレディに語った言葉、哲学者のレオ・バスカーリアの言葉が「世界は変化し続けているんだ」でした。これは「無常」です。「世界は変化し続けている。変化しないものは一つもないんだよ」。これも仏教的です。人間も、作られたものも、どんな石で作ったものも、やがてはなくなりま

す。

人間の死もそうなのです。「若い、若い」というのが「がっちりとした大人」になり、「大人なんだ」と思っていたら、だんだん「腰が曲がる」「足が不自由になる」ということなのです。それが「自然の変化」とここでとらえているところに注目してください。

この童話の翻訳書『葉っぱのフレディ』は百五十万部以上も売れました。なぜ、売れたかを

朝日新聞の『天声人語』では、「この童話の中身が日本人の古くからの死生観に重なっている」からと、評していました。日本人は現代、近代、儲け、儲け、儲けばかりをいっています、心の奥深いところでは「あらゆるものは変わっていくものだ」ということを感覚的に納得しているのです。

では、我々は、葉っぱのフレディのように「もう、ダメだ」というときに、そのまましようがないと死んでいけるでしょうか。九割近くの人々が延命装置を付けても生きたいと考えています。ここが人間のまたおぞましくも悲しいところであって、そこで延命装置を付けてもダメな場合にどうするかが問題になります。

仏教では、「せめてあの世では仏様のような境地、道元禅師のような気持ちに近づけるように、良寛和尚のような裏を見せ、表を見せてという心になってください」という願いが、このお彼

岸の法会となるわけです。

無情の真理は大自然の境地

最後になりますが、昨年十二月二十九日の日にこの世を去られた先代、黒田武志老師について触れておきます。

黒田老師は雑誌『成寿』の中に毎号、必ずどこかに、「諸行無常の真理」を書いておられました。たとえば「方法に証せらるる」については、法というのは一切のものは無常であり、移り変わる。その移り変わる姿そのものが法です。人間も移り変わる。草花も山も宇宙さえも移り変わっていく。それが法という言葉の中に入っています。そうすると、さまざまな法によって人間は悟らされているんだ。身も心もがんじがらめの状態から解放されて自由自在で安心した心のあり方、これを「身心脱落」といいますが、これが道元禅師の遺した『正法眼蔵』に出てき

ます。それを黒田老師はこう解説してます。

「我執（がしゅじゆ）、自分の執着（しゅじゆ）な清らかな自分を取り戻すこと。これが大事で、そのためには大自然の流れに身を任せることが大切である。春、夏、秋、冬。花が美しいと思っただらもう枯れてしまった。桜が咲いたと思っただら散っていく。その自然のあり方、法則性と自分がひとつになったとき、身も心も一切の束縛、つまり煩惱と我執から解放されて、お釈迦様のような清々しい姿になれるのです」と。あのようなお姿になるのが仏教の目標ですから、生きている間にはなれなくても、せめて亡くなつてから、この世の財産も全部捨て去つたとき、あのような姿になるための条件が揃うのです。つまり無常の真理を大自然の流れに見て、大自然の境地になることを「悟り」と黒田老師は見て

おられました。

先代さんは今も仏の道をひたすら歩んでいらつしやるはずです。今度はその後を継がれた、お弟子さんでもある博志さんが、ひたすら先師、黒田武志老師の後を慕つて一歩でも二歩でも近づき、ご老師を通じてお釈迦様に近づこうとして、今一生懸命修行しておられます。檀信徒の皆さまにはそのお姿を見て、心から協力していただきたいということ述べ、私の講演にかえさせてもらいます。ありがとうございます。



育英会寄付者

■平成15年度

伏見 邦弘殿
黙 仙 寺殿
関口 経嗣殿
大光 院殿
谷口 武殿
國廣 敏郎殿
安藤 康哉殿
安藤 嘉則殿
滝沢 孝子殿
増山 静江殿
大場 満洋殿
島田喜久子殿
森 淑子殿
大野 栄人殿
金剛 秀房殿

岡 寸多子殿

吉岡 棟憲殿

内山 款偉殿

福島 伸悦殿

井上 葉子殿

河野富美恵殿

日垣 明正殿

渋谷 佳明殿

岩井 文子殿

伊藤美智子殿

大森 文平殿

大粒来和夫殿

宮田林産株式会社殿

蓮池 泰乘殿

石川 征一殿

日野石材工業協同組合殿

出井 義章殿

平野 國俊殿

貞 昌 院殿

和田 正哉殿

鈴木 邦彦殿

瀧澤 武雄殿

岡 修一郎殿

中西 悠子殿

黒河内貞子殿

珍田 玲子殿

■平成16年度

大光 院殿

黙 仙 寺殿

國廣 敏郎殿

南 有里殿

池田 耕三殿

滝沢 孝子殿

谷口 武殿

岩波 道俊殿

東郷 公殿
岡田 哲道殿
善 寶 寺殿
蓮池 泰乘殿
一適 隆信殿
潮 音 寺殿
安藤 嘉則殿
伊藤 興郎殿
南沢 道人殿
榎森 正浩殿
増山 静江殿
沼倉 幸治殿
久保田賢一殿
大森 文兵殿
渡辺 渡殿
河野富美恵殿
細井香誉子殿
伊藤 文二殿

大粒来和夫殿
吉田 健一殿
宮田林産株式会社殿
高橋 則孝殿
星野 一男殿
少林寺拳法横滨栄光道院殿
明 林 寺殿
根岸 よね殿
山本喜代司殿
稲垣 重弘殿
和田 正哉殿
鈴木 邦彦殿
池田 耕三殿
小森 樹夫殿
大西 正徳殿

■平成17年度
國廣 敏郎殿
黒河内貞子殿
滝沢 孝子殿
橋本万寿美殿
大 光 院殿
一適 隆信殿
宮本 延雄殿
貞 昌 院殿
伊藤 興郎殿
谷口 武殿
良 長 院殿
井 筒 屋殿
古郡 博殿
福田 道子殿
高橋 俊充殿
石川 征一殿
大森 文兵殿

〈成寿賛助〉

■平成15年度

福 泉 寺殿

瑞 岩 寺殿

宮本 延雄殿

養 寿 院殿

河野富美恵殿

面川 清治殿

糸賀 たけ殿

島田喜久子殿

伊藤 勲殿

村上 俊鳳殿

森廣 正男殿

椎名 宏雄殿

渡辺 嘉子殿

黒田 トシ殿

■平成16年度

河野富美恵殿

宮本 延雄殿

いつもご寄付賜りありがとうございます。

『留学僧育英会』の方向性について

善光寺住職 黒田 博志

留学僧育英会の事業は、法灯の国際化をめざした当山二世大圓武志大和尚の発願に始まります。仏教興隆、ひいては世界平和に貢献したいという理念から、設立以来実に二十一年ひとときも滞ることなく今日まで続いて参りました。

「毎食ごと、一口分だけ減らしてご協力下さい」との呼びかけに応じて頂いた檀信徒と、ご賛同下さる多くの方々の尊いご浄財により支えられ成り立って参りました。

これまで、国内外に派遣され受け入れられた留学僧も既に二十一ヶ国、一一二名にものぼっております。

国境を越え、宗教・宗派を問わないこの人材育成のため、育英事業は横浜善光寺の支柱となり、いずれの時代にも限りなく継承され継続さ

れることこそが、初代理事長大圓武志大和尚の遺志と承知致しております。

しかし、昨年末理事長の突然の遷化は留学僧派遣環境が引き継がれないままの事態において発生し、まこと事情が一変してしまいました。

以来、事業環境の整備を急いでおりましたが、本年の留学僧募集には時間的に間に合わず、関係者協議の上、十全を期す意味からいまま少し準備が必要と判断致しました。

この事情は育英会理事、役員各位のご理解ご諒解のもと、三年を超えぬ時期には是非とも実現出来ますよう努力するとともに、仏さまに祈念し縋って参ります。

育英事業を推進するためには、資金的にもいまま少し余裕が必要です。決して一銭一草も無駄にはできません。どうぞ事情慮り、今後とも続けてご協力ご浄財賜りますよう謹んでお願い申し上げます、とりあえず育英会の状況報告と方向確認を申し上げます。

編集後記

▼「成寿」第三十六号をお届け申し上げます。師父大圓和尚の遷化は当山にとって大変な衝撃でした。一月五日檀信徒葬をいただき、参道を埋め尽した二千七百人あまりの皆様、このお見送りには師父もさぞかし、満面の笑みであったことと思います。

▼終生「善光寺は檀信徒の皆様を支えられていまがある」と申していたことが当日の参道に溢れていたと思います。

▼また当日寒い中、長時にわたって、ご焼香お見送り賜り、まことにありがとうございます。心より感謝申し上げます。当日、又その後、大変取り込み、万般不行き届きのことばかりで、深くお詫び申し上げます。

▼以来当山仏前に本当にたくさんの方々がお越しくださいました。普段ではお会いできない方もいらっしや、改めて師父の広さと深さと偉大

さを認識いたしました。さらに海外からまで多勢お参り頂き、育英会の広がり、国際交流の尊さを感じました。本当にありがとうございます。

▼この号は追悼号とさせていただき、ご縁篤きほんの一部の方々に追悼文をいただきました。在りし日の師父が懐かしく思い出され、涙いたしました。まことにありがとうございます。

▼師父は祖父榎庵白純大和尚を常々深く々々尊敬しておりました。私どもに孝順心の大切さを身を持って示してくれ、病床においても、この号の「成寿」は白純大和尚の二十七回忌を特集して追悼したいと申しおりました。その心を汲み、誌上に師父の思い尽せたかどうか、気になりつつとりあえずホツと致しました。

▼この一年、振り返って一年。まことにいろいろありました。例年通り新年祈祷会に始まり多くの山内行事も無事にとり行うことができました。これも支えてくださった檀信徒、山

内の多くのスタッフの方々の御支援のお蔭です。また例年にも増してたくさん檀信徒の皆様にお参りいただき、励ましていただきましたこと身に沁みております。心より深く感謝申し上げます。私はあまりにも若輩、師父の意を肝に命じ、今後、精一杯、精進してまいります。何卒変わらぬ御法愛、御教導賜りますこと心よりお願い申し上げます。

▼「成寿」発行に関わり、いかに一冊の本を創りあげることが大変であったかということを感じ、師父に対する思いをさらに深く致しました。

博志

成寿 第三十六巻

平成十七年十二月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版部

